

弁証法神学の生活史 バルト - トゥルナイゼン往復 書簡・1913年～1914年

その他（別言語等） のタイトル	Lebensgeschichte der dialektischen Theologie Der Briefwechsel zwischen K. Barth und E. Thurneysen, 1913 - 1914
著者	塩谷 饒, 宇都宮 輝夫
雑誌名	室蘭工業大学研究報告. 文科編
巻	36
ページ	151-188
発行年	1986-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/1126

弁証法神学の生活史

— バルトートウルナイゼン往復書簡・1913年～1914年 —

塩 谷 饒・宇都宮 輝 夫

Lebensgeschichte der dialektischen Theologie

— Der Briefwechsel zwischen K. Barth und E. Thurneysen, 1913—1914 —

Yutaka SHIOYA, Teruo UTSUNOMIYA

Bei einer wissenschaftlichen Ergründung der Gedanken von Karl Barth pflegt man ihn — fast ausschließlich und zwar mit gutem Recht — als Professor für dialektische Theologie oder als einen Religiössozialisten, ja auf alle Fälle als eine stets in Vordergrund der Geistesgeschichte gerückte Persönlichkeit zu betrachten. Aber insofern als jedes Gedankensystem mitten in der menschlichen Wirklichkeit seine solide Grundlage haben soll, wäre es in hohem Maße wünschenswert, falls sich eine Reihe von Schriften finden ließe, in denen Worte und Taten des betreffenden Denkers in seinem Lebensbereich konkreterweise dokumentiert sind. Als Informationsquelle dieser Art darf uns der Briefwechsel zwischen K. Barth und E. Thurneysen, welcher sich ungefähr 50 Jahre erstreckt, zur Verfügung stehen, zumal da er nicht einfach aus dienstlicher Verpflichtung bzw. aufgrund intensiver Diskussionen über genau bestimmte Themen, sondern ganz spontan, intim wie auch gesprächsweise durchgeführt wurde. In der Tat wird er uns ein reichhaltiges Material zur Kenntnisnahme des Menschen Barth in vollem Umfang bieten. Daraus lassen sich nämlich eine Anzahl von seinen Ansichten über die sich mit immer schnellerem Tempo wandelnde sozial-politische Lage, seine eindeutige Stellungsnahme zu theologischen Tendenzen damals, und nicht zuletzt manifolde Eindrücke vom Alltagsleben sowie Reaktionen dazu jeweils ins Detail entnehmen. Leider ist die Übersetzung davon bei uns allen Erwartungen entgegen noch nicht zur Erscheinung gekommen. Der Anlaß zur vorliegenden Arbeit wird wohl dadurch begründet. Obwohl vorläufig ein Teil des Briefwechsels (von 1913 und 1914) publiziert werden konnte, hoffen wir doch, daß er zu den Barth-Studien in Japan bei weitem anregen wird.

I. はじめに — 生活史としてのバルトートウルナイゼン往復書簡 —

従来、カール・バルトの思想が研究対象として取り上げられる際には、もっぱら神学者としてのカール・バルトが問題にされ、神学者となる以前の彼はほとんど注目されてこなかった。バルトが自らの思索を「神の言葉の神学」として明確に打ち出すようになったのは、1916年の後半からと考えられるが、たとえそれ以前の彼が問題とされる場合でも、依然として彼は神学研究の対象としてのみ、つまり「いまだ自由主義神学の圏内にいた」神学者バルトとして取り上げられてきた。無論それとは違った観点からの研究もないわけではなく、彼を一人の宗教社会主義者とし

て、政治思想史、社会思想史の文脈で捉えようとする試みも存在する。しかし、いずれの場合にしても、思想史の王道で語られるようなバルトばかりが前面に現われ、他の牧師仲間と食事を共にするのはむかつくと言ったり、娘の自慢話をしたりするありのままの日常のバルトは、ほとんどスポットライトを当てられることがなかった。そうした日常のバルトの生を伝えてくれる最良の資料は、彼がエドゥアルト・トゥルナイゼンとの間で交わした往復書簡であろう。私的な手紙というものは、当該個人の生々しい生の姿を、その喜びと苦悩もともに描き出し、体系的な著述では元来表わしようもない魂の奥底の呻きまで伝えてくれることがある。この往復書簡もその一例と言えよう。自らを取り巻く小さな、あるいは大きな世界との関わりの中で、バルトが感じたさまざまな思い、すなわち怒り・不満・嘆き・共感・慰めなどが、ここから伝わってくる。「この書簡集には、……〔教義学的あるいは説教的〕著作の背後にある作家の実に豊かな人間の世界がかくされている。それらは漫然とした退屈な事務的文章ではない、その文章の中でバルトの人間性が躍動しており、表現的にもユーモアにみち、あざやかで、それ自体一個の文学作品としての美しさを帯びている。……生きたバルトを知るのは、ここが最もよい。内面におこるさまざまな思い、外的諸関係の中での所感や判断、当時の社会的、政治的状况の見方や意見、自他の神学的動きをめぐる感想や評価など、それらはバルトを知るための資料の宝庫である」¹⁾。いかなる人間の思想・意識も何らかの形でその者の生活に座を持っているのであり、その限りではバルトの日常的な生の現実を、彼の息づかいが聞こえるほどにきめ細かく具体的に描き出すことが必要であろう。そのために、若きバルトの生活史を描き出している資料を一部なりとも呈示することが、この往復書簡を翻訳した目的である。永らく邦訳が待望されていながら、いまだに訳されていない彼らの往復書簡のうち、ここでは1913年と1914年のものを訳出した。既に述べたように、弁証法神学者カール・バルトの生成が1916年の終り頃と推測されるから——この頃、彼の身に「何か」が起こった——1915年の書簡も翻訳の対象とすべきであろうが、分量が今回訳出した分の数倍に達するので断念した。今後の継続課題としておきたい。

さて、バルトの生活史に関心を寄せる理由ないし目的について一言触れておきたい。本稿も個人の生活記録を揃えようとしている限り、社会学的な生活史研究を絶えず念頭に置いていることは言うまでもない²⁾。生活史とは個人の生活史のことであるから、定義からしても、資料の点から言っても、個人の主観的現実に着眼する。つまり、個人が自分の環境世界をどのように解釈し、受けとめ、意味づけていたか、また客観的現実に関わりかけてそれをどう変革することによって生き抜いてきたのか、あるいは客観的現実を変ええない場合には、その受けとめ方をどのように変えることによって生き抜いてきたのか、といった側面に注目するのである。とすれば、生活史は、個人の生涯における重要な転回点を理解するのに、とりわけ有効であることがわかる。というのは、そこにおいてこそ客観的現実を見る個人の主観的解釈図式は大きく変化し、新しい世界観や自己概念が形成されつつあるからである。無論こうした転機は、しばしば部分的にすぎず、それ

に対する自覚も稀薄かもしれない。しかし時には、現実を理解する図式が全面的に、しかも意識的に変更されることがある。1916年後半のバルトは、その典型的な一例であったと思われる。(バルト自身は、この転機を単なる内在的転機とは見なすまいし、実際見なしていない。それにもかかわらず、それは内在的な転機でもある。) 彼の生活史を探る意義の一つはここにある。

ところで、1910年代という時代は、バルトにとって、実存の困窮を極めていた時期であった。社会・経済・政治・宗教などのありとあらゆる諸問題が、具体的に言えば、労働者の置かれていた状況をいかに改変すべきか、労働運動全体の中で宗教社会主義の一牧師としてどのような位置を占めるべきか、ナショナリズムと大戦への気運の高まりの中でどのような態度を取ったらよいのか、近代プロテスタント主義やスイスの牧師仲間たちに対していかに関わるべきか、神の言葉を語るべきでありながらその道を閉ざされている自分をどう考えてよいのか、といった諸々の問題が奔流のように渦巻き、彼を弄んでいたのである。まさに彼がこうした混沌とした状況のうちにいたからこそ、彼の生活史は一層興味深く、また重要になる。というのは、ここで問題になっているのは、安易な一般化を許さない具体的・個別的な事柄であって、生活史的なアプローチはそうしたものの研究に適していると考えられるからである。ごく普通の言い方をすれば、学問は特定の約束事にに基づき、固有の枠組の中で、法則の定立が容易な一般的・普遍的と思われるものを重視してきた。それに対して生活史は、個別的・個性的なものに注目しようとする。そこには二つの理由があると考えられる。まず第一に、人文・社会科学が対象とする人間的・社会的現実には、一定の制約の上に成り立つ研究者自身の立場から性急に合理化できるようなものではなく、法則定立的な研究方法では捉え切れないような、元来もっと微妙で曖昧模糊とした混沌なのではないか、という反省が挙げられる。本来人間の生活というものは、意に反する過去をひきずり、否応なく特定の現在を引き受け、未来の予測もあやふやなまま営まれるというのが実態に近いのではなかろうか。とすれば、日々営まれる生活の中にさまざまな混乱や矛盾が含まれていても、何ら不思議はない。まさに生活史はそうしたなまの生の姿を写し出すのに適しているのである。

しかし、個性的なものが絶対的な意味での個別であったなら、(対象が自己自身である自分史などを除けば) 研究者自身の生とも全く関わりを持ちえないであろうから、それを研究対象としようとする動機づけも生じえないことになる。従って、個性的なものに注目すると言っても、それは何らかの意味では、やはりある普遍性を持っているのでなければならない。つまり、従来世の中で広く重んじられ、価値を認められ、もてはやされてきたような「普遍性」ではないにせよ、奥深いところで研究者の心の琴線と触れ合う普遍性がそこには潜んでいるのである。いわば、個別に徹することによって普遍に通ずるところがあるのだ、とも言えよう。生活史は、従来の学問が無視ないし軽視してきた現実を目を向けようとするのである。

最後に、個性的なものに注目しようとする生活史は、もう一つ重要な役割を担っていると思われる。それは、未知なるもの・異質なるものに対して眼を見開かせてくれるという点である。バ

ルトという人間そのものが、ある意味ではわれわれには極めて異様な存在である。異質なものと
の出会いが人間を豊かにすると言いうるならば、彼の生活記録の一部をここに提示することにも、
何がしかの意味があろう。

ここに訳出した書簡集は、全体の分量からすればごく僅かであるとはいえ、生活史の資料・伝
記的資料として、また神学・神学史の資料として、さらには政治・社会思想史の資料として重要
であると考えられる。第一次資料というものは、訳者がことによると誤れる動機を抱いていたと
しても、いささかも価値を減ずるものではないであろう。読み方は、また何を読み取るかは、各
人に委ねられているからである。

なお、本稿の構成について一言述べておく。Ⅱはバルト70歳記念論文集『応答』に掲載された
トゥルナイゼンの論文である。論文と呼ぶのは、当を得ないかもしれない。というのは、これは
『応答』に収録された最初期のバルト・トゥルナイゼン往復書簡の抜粋に対するイントロダクシ
ョンだからである。訳者の序論よりも、当事者自身による序言のほうが、はるかに意味のあるも
のと思われた。彼らの往復書簡自体を読むに先立って、その内容、性格、彼らにとっての意義な
どに関して、興味深く適切な証言がここから得られるであろう。Ⅲは往復書簡そのものの翻訳で
あり、全集版には書簡本文に先立ってトゥルナイゼンによる序文が付いているので、これも訳出
しておいた。使用したテキストは以下の通りである。

Ⅱ. Eduard Thurneysen, "Die Anfänge: Karl Barths Theologie der Frühzeit," in: *Antwort, Karl Barth zum 70. Geburtstag am 10. Mai 1956* (Evangelischer Verlag AG, Zollikon-Zürich, 1956).

なお、Siebenstern 版では表題は単に "Karl Barths Theologie der Frühzeit" となっており、本稿
ではこちらを採った。

Ⅲ. *Karl Barth Gesamtausgabe, Karl Barth-Eduard Thurneysen Briefwechsel*, Band 1, 1913-1921
(Theologischer Verlag Zürich, 1973).

書簡本文にはトゥルナイゼン自身によって註がつけられている。これはそれぞれの書簡の末尾
にまとめてあり、註の番号は括弧でくくられていない。それ以外はすべて訳註であり、区別する
ために番号に片括弧を付け、巻末にまとめた。

(註)

- 1) 大木英夫『バルト・人類の知的遺産72』講談社、1984年、306頁。
- 2) 社会学における生活史研究の位置づけと意義については、桜井厚「社会学における生活史研究」『南
山短期大学紀要』第10号、1982年が比較的よくまとまった議論を展開しており、本稿の考え方も基本的
にはこれとほぼ一致する。

Ⅱ. カール・バルトの初期の神学

エドゥアルト・トゥルナイゼン

カール・バルトは、1911年から1921年まで、アールガウ州¹⁾の農村工場町、ザーフェンヴィル²⁾で牧師をしていた。それ以前には、彼はベルン、ベルリン、チュービンゲン、マールブルクで学生時代を過ごし、さらにジュネーブで副牧師をしていた。まさにこのザーフェンヴィル時代に、彼が神学者および教会人としての本来のライフワークに着手する時が開始されたのである。ザーフェンヴィル時代に、カール・バルトと私は、仕事の上で緊密に交わり、それゆえ絶えず意見を交換し合っていた。私自身は、1913年から1920年まで、アールガウ州ロイトヴィル²⁾の牧師であった。我々双方の村は、丘陵や谷あいによって隔てられていた。確かに、会うために絶えず行き来し合ったけれども、我々はそれに満足しなかった。まことに我々は、—— 当時こう言っていたものであるが—— 「教会や世界や神の国で生起した」すべてのことについて、真の兄弟のような間柄で意見を交わしたいという止み難い欲求を持っていたのである。当時、我々の牧師館にはまだ電話がついていなかった—— このことは、実際、単なる不運どころではなかった—— ので、手紙のやり取りがさかに行なわれるようになり、ほとんど毎週に及んだ。この時代のカール・バルトの筆になる凡そ300通の書簡・葉書の中から、ここでは若干のものを公刊したい。

そうしようと思ったのは、単なる伝記的な関心からではない。伝記というのは、凡そ後向きのものであり、それゆえ追悼の辞のようなものになりがちである。しかし幸いにも、カール・バルトは我々の間にあって未だ衰えることなく生き生きと活動している。70歳を記念して出されたこの回顧録の中で、いわば彼自身の墓石のようなものに出食わしたとしたり、恐らく彼は喜ぶまい。カール・バルトが自分のライフワークとして選んで進んで来た道は一体どのようにして始まったのかということについて、なるほど我々は人間的・伝記的関心をも抱いている。しかし、発端がどうあったかということより重要なのは、やはり彼のライフワークそのものであり、従って、最初から彼にとって問題であった主題的事実、彼を通して彼と共に我々もそこへと呼び召されている主題的事実である。

それゆえ一切の出発点は、カール・バルトが田舎牧師であり、彼が深く感動して牧師職を百パーセント真剣に受けとめ、遂行して行ったという事実にある（このことがまだ分かっていない人がいるなら、この書簡集がそれを明示してくれる）。バルトは土曜日ごとに説教草稿を書いていた。実際、微に入り細を穿って書き上げられたこの時代の説教草稿が、幾百となく存在する。彼はこれらの説教を日曜日に朗読してしまうのではなく、感銘を与える話し方で教会員に自由に説教した。彼はこうした説教の仕事のために、平日にはいつも聖書に沈潜し、朝早く畑に出て次々とウネを作って行く農夫にも似て、彼なりの新しいやり方で聖書に鋤を入れて行った。その際、彼は、この仕事をなすためには、特に宗教改革者たちの注解を徹底的に参照・検討しなければ駄目だということを思い知らされた。説教のための聖書への沈潜から、彼はその後『ローマ書講解』第1版を、そしてこの第1版を完全に捨て去る形で第2版を書いたのである³⁾。我々は本書簡集全体を通じて、この事実に逢着するだろう。しかし『ローマ書講解』の他にも、公刊されてはいない

がこの時期に属する研究がある。彼が教会員のサークルと一緒に熟読し、研究したエペソ書に関する研究、およびコリント後書の研究がそれである。彼はこの両書簡を説教でも徹底的に講解した。この時代の説教のいくつかは、我々二人が共著で出版した説教集、『神を求めよ、さらば生くべし』⁴⁾と『来たりませ、創り主なる御霊よ』⁵⁾に収められている。カール・バルトは、既にこの初期の時代から、聖書の真意を読みとって講解する者として立ち現われている。つまり、彼の前には聖書各書の表が掲げられ、カルヴァンに始まって、聖書主義者から現代の批判的聖書注解に至るまでの、諸々の注解書が開かれているのである。これこそ当時も今も、バルトが自分の全神学を汲み取って来る泉である。彼の神学は、説教の仕事から生まれ出て、教会の宣教に奉仕する。このことは、今もって変わらない。現代においても聖書という泉から新たに水が流れ出すということ、これこそここでの重大な関心事であり、唯一の関心事である。発端を見れば直ちに明らかになると思うが、バルトは抽象的な思考をしない。ここで抽象的というのは、聖書から離れてという意味である。彼は自己の内面性から神学的思弁を構想したりしない。彼にとって大切なのは、体系などではない。彼は絶えず聖書に学び、聖書について教える。彼をこれとは別に理解しようとする者は、彼を理解しないであろう。まさしくこのように聖書と宣教とに集中したからこそ、既にザーフェンヴィル時代から、彼は当時の神学——それは右から左まで全面的に思弁がかかっており、「成人した」⁶⁾現代的思惟との対抗上、弁証的にもなっていた——と鋭く対決するようになったのである。この対決から、カール・バルトの名と結びついた新しい神学の萌芽が生じた。カール・バルトは、聖にして恵み深く、義なる神についての使信を聖書の中に読んだ。その神はいかなる擁護論をも必要とせず、主権者として御言葉を発し、この御言葉に基づいて、そしてそれに基づいてのみ、認識されようと欲し、また認識されうる。この神の言葉はイエス・キリストと呼ばれ、幾千年の時の流れが彼を囲むように静止して立っている。なぜなら、彼はあらゆる時の中心であり、彼と共にこの時の只中で明けそめた神の新しい世界、御国をもたらす者だからである。この点を知るためには、「聖書の問いと明察と展望」に関してザーフェンヴィル時代になされた初期の講演⁷⁾、および「聖書の中の新しい世界」に関する講演を読みたい。後者は、当時ロイトヴィルの教会員たちの前でなされ、次に『神を求めよ、さらば生くべし』という書名で刊行された最初の説教集に収められ、その後講演集第1巻⁸⁾の中に再録された。

バルトにとって重要だったのはこの使信であるがゆえに、——あるいはこう言い換えてもよい——バルトはもはや抽象的にではなく具体的に、つまり聖書に基づいて考えるがゆえに、また、聖書的思考とはそれ自体実存的思考なので、カール・バルトの神学的思惟は最初から人間の生へと向けられていた。一方には実存、すなわち人間の現存在があり、他方には、この現存在へと向かい、それを捕まえ変える神の言葉がある。これが両極であって、すべてを照らし出す閃光が生じるためには、両極の間で再び放電が開始されねばならない。しかし、カール・バルトが現存在とか人間の生と理解しているのは、あらゆる敬虔主義の信心深い思考とは全く異なって、内的生

だけではなく——確かにこれも考えられてはいるが——、外面生活が持っている内面生活としての内的生であり、従って、実存の全体における人間、常に所定の時と世界の内部で実存するがままの人間である。神の言葉と離れてそれ自体で実在するような生の領域はないし、世界の自律性とか、それ自体で妥当性を有する文化もない。たとえキリスト教的宗教であっても、宗教が生活と並んでそのかたわらに存在するわけではないし、同時にすぐにも外へ向かわなくてもよいような内向性などもない。このように理解するなら、カール・バルトの言葉は最初から「政治的」だったのである。職業という意味で政治家にはならなかったが——なろうとする誘惑はしばしば非常に強かった——、聖書の言葉を宣教する者としてのカール・バルトは、当時の世界の事件との関わりの中で、本質的に政治的な問題に対しても、彼の教会と国の枠内において、極めて精力的かつ具体的に発言していた。牧師としては異例の行動であったが、彼は当時、社会民主党に入党し、教会の中で、困窮した労働者の組織化に手を貸した。こうしたことがあらゆる非難や誤解を招いたことは明らかである。しかしそれは、彼が後に突き進んで行った道の始まりに他ならず、国家社会主義の政治権力に対する告白教会の闘いでも、スイスでの抵抗運動でも、彼は同じ路線上で活動していた。だからこそ、当時既にザーフェンヴィルにおいて、聖書と共に新聞が深い関心をもって読まれ、聖書と時代の出来事とが相互に関係づけられたのである。しかし繰り返す言うが、時代の出来事はすべて、キリストにおける神が悪のうちに居続けるこの世から単に人々の魂を救い出そうとするばかりではなく、むしろこの悪しき世を愛し、御子の十字架と復活において世の悪を裁かれる、ということのしるしおよび証として見られたのである。当時我々はブルームハルトの言葉を借りて好んでこう表現していたのであるが、神の裁きは、「正しく向け直すこと」である。神の裁きは恵みの裁き、救いの出来事である。神はキリストにおいてとっくの昔に悪を征服し、勝利を収めた。当時ザーフェンヴィルにおいて、バルトは、キリストによって「物笑いにされた」もろもろの主権者と、支配と、権威⁹⁾について力強く語っていた。それを知るためには、説教集第1巻の中の受難日説教と復活日説教とを参照されたい。勿論、勝利は信仰にしか見えず、従って我々の目には隠されている。しかし、隠蔽の時が終わり、御国の勝利がおおいをはずされてははっきりと見えるようになる日が、やがてやって来る。カール・バルトは、当時既に、再臨をこのように理解していた。そしてこの日の先駆けとなる射光が、今日既にここかしこに光輝いており、「小さき羊群」としての教団が、夜を経て昼に向かって行進している。

カール・バルトの宣教は、こうした終末論的観点を最初から持っていた。終末に向かって「急ぎつつ待つ」¹⁰⁾ ことこそ、バルトにとって切実な問題であって、それがあらゆる宗教的満足や確信に対して、またすべての誤れる教会活動に対して、彼を警戒させた。さらにそれは、何かこの世の革新運動——社会的諸課題へのあらゆる真面目な取組に対して、バルトは寛い心を持っていたが——の内に最終的結論を見出さないよう、彼を用心させた。これに関しては、同じくザーフェンヴィル時代のタンバッハ講演——そこでのテーマ、「社会の中のキリスト者」は、会議の

主催者である宗教社会主義者たちが掲げたものである——を読まれない¹¹⁾。注意すべきは、終末論と倫理との間にある意味深い弁証法であって、これはカール・バルトの場合、この講演で初めてはっきりと示された。確かにカール・バルトは、「終末が近い」ことを一時も忘れはしないが、かといって先走りすぎて、来るべきものを思弁的に先取りしてしまうこともないのであって、この点には注意が払われねばならない。倫理は終末論のために消え失せてしまうのではなく、むしろ終末論の中でこそ基礎を据えられるのである。バルトが取った道は、終末について神秘的に語る道でもなく、希望を放棄する道でもなく——ましてや希望放棄の現代的表現である、終末遅延に関する陳腐な教説の道でもなく——その真中に行く。

ここで、予クリストフ・ブルームハルトの名を挙げねばならない。彼は公の学校神学には奇妙にも無視されてしまったが、アルベルト・シュヴァイツァーや彼を継承した非神話化の神学者たちよりもずっと以前に、イエスの使信の終末論的性格をその根本的意義において認識し、聖書解釈の上でも現実の生活でもそれを主張していた。カール・バルトは、ブルームハルトの思惟世界に関して、現在に至るまで最良のとはいえないまでも、当時としては最良で最も簡潔な概論を書いた¹²⁾。それは説教集第1巻の末尾に収録されており、本書簡集から読み取れる通り、ブルームハルト自身の賛同をも得た¹³⁾。バルトは、後期の『十九世紀プロテスタント神学史』の中で、もう一度、父ブルームハルトについて論述している¹⁴⁾。しかしさらに、ブルームハルトと並んで、スイスの二人の神学者、レーオンハルト・ラガツとヘルマン・クッターの名を挙げなければならない。彼らは宗教社会主義の父たちであって、当時のバルトは、無論大いに留保しつつではあったが、しばらくの間この立場を奉じていた。彼は勿論ラガツ主義者にも、クッター信奉者にもならなかったが、それには十分な理由があった。彼はラガツに、とりわけクッターに強く刺激された。しかし、まさに自分と彼らとの距離の近さのゆえに、その間に明確な一線が引かれることにもなったのである。その変遷の跡は、我々の往復書簡の中に見出されるが、しかし時代状況に起因するその辛辣さのため、公刊されるのにふさわしくない。バルトはクッターやラガツと近かったが、それにもかかわらず単純に彼らと立場を同じうすることはできなかった。まさにそれゆえにこそ、彼はこの時期に、突然のように再び彼らから離れ、己れの道を歩み続けねばならなかったのである。

彼自身の道は、『ローマ書講解』第2版においてあらわになった。それが書かれたのはザーフェンヴィル時代であり、草稿は、バルトがゲッティンゲンに移る時に完成した¹⁵⁾。この著作で、現世的発展思想の最後の残滓も最終的に捨て去られた。カール・バルトは、観念論的・新カント的な概念形式をすべて放棄した。天と地、神と人間との差異を表現するための有限—無限という図式は、もはや用いられない。そもそも彼は、あらゆる世界観的掩蓋の外へ抜け出してしまったのである。以後彼は、自らの神学的主張を確かなものにするために、何らかの存在論を基礎として利用するのを拒む。それゆえ彼は、後の非神話化のテーゼや前理解¹⁶⁾に関するその教説に

も攪乱されず、また、実存哲学を知りはするが、その脇を通り過ぎて進んで行く。従って、実存哲学によって自らを基礎づけようとした神学が深刻な実体喪失に陥ったとしても、彼がその連帯責任を負うべき必然性は何らない。実際、そのような神学の破綻は、既に明瞭である。この神学が非神話化を一貫して押し進めれば、非ケリュグマ化に至る。しかしカール・バルトは、自分の出発点に忠実であり続けた。彼にとってまさに疑いなく重要なのは、ケリュグマであり、宣教であり、その周りに集まる教団である。彼はそこから、そしてそこからのみ、人間実存を脅かすあらゆる暗い謎の究明と解決を期待する。しかし宣教とは、神の言葉の宣教に他ならず、それは、啓示の記録として知られ、聖霊によっていつも新しく生けるものとなる聖書に基づいてなされる。それゆえにこそ、彼は、神認識・人間認識の他のあらゆる源泉をかくも激しく拒絶するのである。彼がザーフェンヴィル時代の説教集第2巻、『来たりませ、創り主なる御霊よ』の序文として、「言い難き高みにおられる神は、探究されえない」というカルヴァンの言葉だけを記したのは、いわれのないことでもなく、また単なる偶然でもない。神は本当に神であり、天は単に何らかの超越世界ではなく、ひたすら神の天である。しかし人間は地におり、そうあり続ける。人間は肉の人間、罪の人間であり、死へと失われた人間である。人間に助けが与えられるべきであるとすれば、神が地に降り、罪と死のうちにいる人間のもとへと来なければならないし、また神はそれを欲し、実際そうされるであろう。上から下へのこの道が、人間が神と永遠の生命へ至る唯一の通路である。さきのカルヴァンの言葉に従えば、人間の自然的ないし超自然的認識の上昇階梯などというものはなく、敬虔な人間であっても、とにかく人間が努力して登れば神に到達できるような道はない。自然から恵みへの道はなく、結合点¹⁷⁾すらなく、人間が神に応答する生まれながらの可能性は存在しない。唯一、恵みそのものの道だけがあり、それはイエス・キリストの道と呼ばれる。恵みとは、いつでもイエス・キリストの恵みであり、旧約聖書においても既にそうであった。なぜなら、恵みはいつでもイエス・キリストにおける言葉の受肉であり、それは預言者たちの証言においても既にそうであったからである。後にバルトは、両聖書間に差異のあることを認知しつつも、ヴィルヘルム・フィッシャーの『旧約聖書のキリスト証言』¹⁸⁾を全面的に受容した。イエス・キリストにおける言葉の受肉は、旧・新約聖書の歴史的研究を排除せず、逆にそれを包含する。無論それは、歴史化の作業の中で、再び自然神学を忍び込ませるための余地を残しておこうということではない。

後期のカール・バルトの『教会教義学』に見られる、宗教改革者たちの神学すらしのぐようなキリスト論的集中は、ここから理解されねばならない。自然と恵みとの協働、存在の類比、またそれに基づくマリア論といった教説を展開するカトリックの神学と教会に対してバルトが画する鋭い一線も、ここから理解されるべきである。また、フリードリヒ・ゴーガルテンやエミール・ブルンナーなどの仲間たちとの絶縁——その萌しは既に初期にあった——に関しても、同じである。後になされたこの絶縁の激しさは、ある不安と危惧に由来する。つまり、何らかの形で自

然的神認識を神学の中へ導入することは、教育上ないし心理学上の、または弁証的一論争学的な配慮に基づいているか、あるいは近代の世界像や、「成人して」教会と疎遠になった現代人に対する伝道上の顧慮に基づいており、それは興味深くはあるけれども、人間の救済と和解の純粹に恵みとしての性格を教会の宣教からほかして消し去ってしまうのではないか、従ってまた、人間から救いの本当の認識を、それゆえ信仰を奪ってしまうのではないか、という不安と危惧である。この点では、ほんの僅かでも譲歩はできず、また許されなかった。

ここでバルトが取った道は、極めて険しく困難な、そして最初の頃は全く孤独な道であった。恵みにのみ基づく義認ということが、全く新しく、はっきりと打ち出されねばならなかった。ここに、『ローマ書講解』改訂第2版の意義がある。この書をもって、かの険しい尾根道への第一歩が踏み出される。ここでいかに断固たる歩みがなされねばならなかったかは、あらゆる宗教的な営みの、就中キリスト教の体裁をとる宗教的な営みの払拭を見れば、よく分かる。ここでの闘いの相手は、「律法の業」による誤れる義認である。犠牲的行為によって、また宗教的律法を自ら満たすことによって、自分を神の前で義としようとする人間の試みは、従って、神および神の恵みと戒めとに対する反抗は、人間の宗教的な振舞い——それがどのような形で現われようとも——において絶頂に達する。そこでこそ罪は、本来の最も頑な形をとって激しく突出して来る。世がまぎれもない神否定を示すのは、まさにこの点である。敬虔を装う世こそ、まさに世の最悪のあり方である。この世の罪のために、キリストは死なねばならなかった。カール・バルトは、すべての律法の業に対するパウロの怒りに満ちた攻撃をそのように理解する。だからバルトの釈義においては、恵みと宗教上の営みとは、厳しく対立し合うのである。恵みはキリストの血の恵みであるがゆえに、決して「安っぽい恵み」ではなく、非常に高価な恵みである。そのみが「すべての不義なるもの」に向けられた神の怒りを鎮めるのであり、キリストの恵みは、人間が、特に敬虔な宗教的人間が支払うどんな代価によっても置き換えられず、あがなわれない。しかしまた、人間にとって希望も大きい。というのは、恵みの対象は、単に「よい」、「敬虔な」、「キリスト教を信奉する」人間だけではないからである。むしろ恵みは、人間である限りの人間、従って、不遜にも恵みをわが物にせんとする敬虔性をことごとく剥ぎ取られた人間、従って無神性をあばかれ、自らを棄てられた者と識る人間、死のうちに裁かれ、地獄に沈みつつある者に向けられる。こうしたすべての者に恵みは向けられる。彼らにとっては、かろうじてなお一つの希望＝キリストがあるからである。カール・バルトは、ローマ書の大きな主題をなす、その1章16・17節をそのように理解する。そしてこうした理解のために、当時の教会のぬるま湯的な釈義とそれに対応する説教から、バルトは遠く離れて行くことになる。彼の注解は、全篇を通じて火山のように灼熱し、煮えたぎっている。しかしローマ書の使信のこうした新しい理解は、同時に、現代の人間にとって新しい理解をも切り開いていないだろうか。「安っぽい恵み」という意味ではなく、福音書におけるあの秘義的な「取税人や罪人との飲食」という方向での、教会と世との新

しい連帯の道が切り開かれていないだろうか。従って、神に棄てられず、むしろ不可解にも愛されるこの世に、また今日の世俗の人間に、喜ばしき使信を新たな方法で理解させる新しい可能性が切り開かれていないだろうか。まさに妥協なしに聖書へと、そしてそこに啓示されたキリストへと立ち帰ることが、外にいる人々に対して扉を広く開けることにつながる。教会の「積極主義的」¹⁹⁾説教や敬虔主義的説教は、また、妥協によって軟弱になった自由主義神学や文化に尾を振る神学の教養説教に至っては言わずもがな、もはや彼らの心に達しはしない。現代において、こうした諸問題と極めて真剣に格闘したディートリヒ・ボンヘッファーは、専ら聖書およびそこに啓示されているキリストの恵みへのバルトの集中に対して違和感を抱き、それをカール・バルトの「啓示積極主義」²⁰⁾と呼んだ。しかし他方では、ボンヘッファーは、非宗教的人間、つまり「あたかも神がないかのように」、「成人した」世界で生きねばならず、まさにそれゆえにこの世に対する神の愛の大いなる秘義の真近に生きている人間に関する彼の見解においては、『抵抗と信従』²¹⁾に見られるように、バルトに対して大いに親近感を抱いてもいた。現代人の状況に関するこうした新しい認識を展開するために、ボンヘッファーはバルトの『ローマ書講解』第2版をはっきりと引き合いに出している。

カール・バルトは、この時期の研究や説教において、新約聖書証言の中心的根源に再び新たに目を開いて行った。彼自身は、例えばローマ書という「鉱山と深海」を汲み尽くすには自分はまだまだ遠いということを繰り返し語らねばならなかったが、それでも彼は我々にそれを感じとらせてくれた。その際、彼は、新約聖書の証言が今日呼ばれるところの「神話的また口碑的」外被を、従って近代的世界像の外被とは全く素性の異なる外被を持っていることを最初から自覚していた。バルトは、歴史的・批判的研究の根拠ある認識を決して斥けなかった。むしろ彼は、それによって誤れる「啓示積極主義」のドグマから解放されたのを喜んだ。しかし彼は、そこから解放された後すぐに、聖書の真理に比べて現代の世界像には妥当性があるという新たな自由主義的ドグマに屈従してしまったわけではない。大胆にも彼は、あらゆる「神話や口碑」を貫いて、聖書の証人たちの声を、しかも一字一句ゆるがせにせずに、真剣に受け取ろうとした。その際彼が発見したのは、初期の彼が、確かに論義をかもしたが、主題的事実を突いた「原歴史」の概念によって表現したものである。原歴史という概念で彼が言おうとしたのは、聖書の証言が「当時からしこで」、「紀元1年から30年の間に」、信条の言葉で言えば「ポンテオ・ピラトのもとで」、歴史の中で生起した神の歴史として語る出来事である。すべての歴史は、この歴史の中に自らの秘められた中心を持つ。あらゆる時代のすべての人間の生を定める永遠の決断が、そこで下されているからである。

カール・バルトがこの原歴史概念を発見したのは、フランツ・オーヴァーベックの著作の中であつた。教父学者でもあり、フリードリヒ・ニーチェの友人でもあつたオーヴァーベックは、バルトよりもずっと以前に、その当時の「神学のキリスト教性」を、とりわけハルナックによる原

始キリスト教の歴史記述を標的に攻撃していた。バルトは、自分とのあらゆる差異にもかかわらず、オーヴァーベックの洞察に親近感を抱いた。オーヴァーベックの遺稿を編集した『キリスト教と文化』²²⁾が出版されたのは、まさにこのザーフェンヴィル時代である。バルトはそれを検討し、『キリスト教の内的状況』²³⁾という表題の研究をものしたが、それに対しては拒絶や反論が巻き起こり、彼のオーヴァーベック解釈は実際のオーヴァーベックに関する無知に基づく主張とされた。しかしバルトは、外部に向かっては懐疑的なふりを装ったオーヴァーベックを貫いて、その背後にある彼の本来の意図を的確に表現し、結局は彼を正しく理解した。いや、オーヴァーベックが自分を理解していた以上にすら、彼を正しく理解したのかもしれない。本書簡集には、当時まだバーゼルで存命中であったオーヴァーベック未亡人をバルトが訪問したことについて触れた手紙がある²⁴⁾。彼女は、夫のライフワークに関するバルトの解釈を全面的に肯定することができた。

初期のカール・バルトを語るに際して、当然見落としてはならないのは、もっと限定された領域、すなわち当時の彼がその中に立ち、生きねばならなかった教会という環境である。バルトは必ずしも教会員とうまくやれたわけではないし、教会員も彼と必ずしもうまく行っていたわけではない。既に言及したように、彼の取った政治的立場が争いを招いた。彼の説教を理解するために、教会員が大変な骨折りを強いられたなどということは、とり立てて言うほどのことでもない。彼自身が苦しんだのは、自分が「人々を満足させる牧師」たりえないことであった。このような表題をもった説教が、当時ザーフェンヴィルで印刷され、ザーフェンヴィルの地域を越えて広く感銘を与えた。しかし、彼が忠実な「小さき群れ」を自分の周りに集めることができ、彼らは今日に至るまで自分たちのかつての牧師を忘れることができずにいるということは、言っておきたい。彼が特別に努力を傾けたのは、堅信礼教育であった。もっとも彼は、この職務がとりわけ大変だったと嘆息してはいた。彼が立てた指導原則に沿った当時の授業課程が幾つか印刷されずにあるが、それを読めば、彼が若者たちをどのように聖書の使信へ導き入れようと試みたかが分かる。しかしさらに、教会という環境を構成していたのは、アールガウ州の教会、スイスの教会、さらにそれを越えた教会にいる当時の牧師仲間でもあった。当然予期されたことではあったが、カール・バルトの神学者および牧会者としての造反は、彼らの間で紛争の火種となった。牧師協議会で、牧師の集会で、教会会議で、激しい論争・対決が起こった。バルトは右へ左へと剣を交わしたが、「他の人々」、つまり同僚の聖職者たちや教会と神学における当時の大物たち——私が考えているのは、スイスでは例えば、バーゼルのパウル・ヴェルンレであり、ドイツではマルティン・ラーデあるいはアードルフ・ハルナックである。ハルナックとバルトとの間には、後に有名になった「問いかけ」と「応答」が取り交わされた²⁵⁾——との関係は、極めて弁証法的であった。しかし、事態がこれ以外でありえたであろうか。カール・バルトは、遠くよりのある呼び声を聞き、今やそれに従わざるを得ない者として我々の前に歩み出て来る。しかし「他の人々」

は、この呼び声にまだ捕えられておらず、既にそれに捕まった男のまわりを、差し当たりまだ^な捕を免かれている者たちとして、取り囲んでいるのである。彼らには、この捕縛された男につき従って、彼らの道とは遠くそれているこの男の道をたどろうなどという気は、さらさらしない。それどころか彼らは、彼をその道から引き離し、彼を行かすまいとするのである。一体どういう訳で彼は列から飛び出てしまったのだ、と彼らは問う。なぜ彼は、他には誰も考えないようなことを考えるのだ。なぜ彼は周知の境界線をすべて踏み越えて、新しい危険な広地や高所へと敢えて歩を進めるのか。当時既に論議を呼び、そして受け容れられにくかったバルトのこの態度も、彼の書簡の中に明瞭に現われている。しかしそれについて知ることは、多分よいことであり、我々にとって慰めにすらなるであろう。ヴァルター・リューティが、初期バルトに関する私のこの叙述を一読して、次のような手紙を書き送ってきたが、実際それははたはずれではない。「一切がどのように生じたのかに関して、何がしかの洞察を得ることは、我々牧師の中の特に若い世代にとって、有益です。明晰で卓越したバルトというのは、若い人々にとって、どちらかといえばしばしば困惑の種とならざるをえません。ですから、この古い強い酒もかつては発酵のさ中にあったことを彼らが知るのには、重要なのです—— そうですとも！」

ところで、さらに重要なことがある。すなわち、若きカール・バルトが極めて真剣・切実に直面させられた問いと課題は、今日のすべてのまじめな神学者と牧師の抱えるそれと本質的には何ら変わるところがないのを、我々が認めることである。彼らも、個人的な生の諸問題や教会・教派・学問上の特殊な関心にいつまでも拘泥せずに、何が問題なのかをほんの少しでも知りさえすれば、常に新たにこの問いと課題に直面することになる。重要なのは、バルトの答えに耳を傾けることである。それは、彼が当時発見した答えであり、彼が今日に至るまで与えようと努めている答えでもある。というのは、初期のバルトが走り抜けてきた道の各段階のうちには、彼の後の活動の全行程が既に反映しているからである。そこに当時既に、そして今日再び、至上の関心事としての正しい説教の問題がある。そこに、正しい聖書理解の課題がある。説教は聖書の釈義以外のものであってはならないからである。キリストおよび彼の来たるべき御国の使信としての聖書使信を、今日の人間が理解でき、それによって動かされ、変えられるような方法で伝えるべしとの任務もまたある。従ってまた、生ける教団の問題がある。教団は今日の人間に対する自己の責任を自覚しており、それゆえまたしても単なる宗教的な感情・意見・言葉を育成し提供するのではなく、神の言葉、すなわち不可視の神の言葉と可視的な神の言葉の周りにのみ集い、宣教と生活において、言葉と行為において、それを力強く燭台の上へ置くのである。さらに、近代的人間そのものが謎として課されている。必要なのは、近代的人間をその実存において神の言葉から全く新たに理解すること、キリストに基づいて近代的人間と兄弟愛において連帯することである。そしてさらに、伝統となった教会という一層大きな謎がある。それは常に新たに啓示の出来事に向かうのではなく、自らの諸々の制度の中で身動きがとれなくなり、硬直してしまう。そのため

それは、半ばいかめしく、半ば退屈な場所と化し、この世は幻想を抱いて、あるいは醒めた意識で、その脇を通り過ぎてしまう。とはいえ、この伝統的教会こそが全く新しく目覚め、全く新たに復活せねばならない。なぜなら、我々がその中で生きて行かねばならないこの世は、本当に深刻で切実な諸問題を抱えているからであり、世は——それを知っていようといまいと——福音以外の何ものをも待望してはいないからである。それとも、この世の問題に対する別の答え、窮境と罪のうちにあるすべての個々のこの世の子らにとって、福音の答えとは別の答えがあるのか。私はそんなものは知らない。世に向かって答えるこの言葉、従って「政治的な」この言葉は、すべての個々人のための言葉であると同様、教会に新たに与えられねばならない言葉でもある。

初期のカール・バルトが取り組んだ、そして今日に至るまで彼が取り組んでいる問いと、それに対して与えようと試みた答えは、以上のようなものであった。しかしそれらは、彼にだけではなく、我々すべてに関わるべきだし、実際関わる。それゆえ、バルトが既に初期に歩んだ道に注目することには、意味がある。

さて、我々が彼の手紙を読む時、そこには、この初期の全活動期間を通じて、我々にとって全く身近で人間的な、そして実際よろめきつつさまよい歩いているバルトが見えてくる。彼はまだ人に知られず、人の口にのぼらぬ存在であったが、しかし、たとえどこで営まれようとも正しい神学作業ならば、つまり霊的に把握され、霊的に営まれる神学作業ならばすべてが有している希望を確信しつつ、当時の同時代者たちの間をさまよい歩いていた。

探求しながらも窮境に陥っていた初期のある日、私を慰めるためにカール・バルトは、ロイトヴィルの牧師館の来客名簿に次のような詩を書いてくれた。

我らは、他の人々の間を巡礼しながらも
我らのやり方を守り続けよう。
恐らくその後、さすらい行く中で
息をより長くしたとりえが現われる。

数年後の1926年春に、彼はこの初期の記入に修正を施し、次のように書き直した。

我らは、他の人々の間を巡礼しながらも
我らのやり方を守り続けようとした。
だがさすらい行くうちに、次第に
我らも息が切れて来た。

我らは今、昼の暑熱の中を行く。

もう、さして笑ってられない。
我らがかつて用いた数々の角
その先も今は丸い。

神さまは目下のところ
《我らのやり方を守り続け》させたもう。
やがて影の面が明らかになり、
そして抑制が必要となって来る。

だが、抑制のために我らは
よりよき歩みの期待を減ずるまい。
旧き光は衰えることなく
新たに罪人に輝き、幼な児に輝く。

以下の書簡抜粋集を、上の二つの詩によって画される枠の中で読み、理解してほしいと思う。

Ⅲ. バルトー トウルナイゼン往復書簡

序文

エドゥアルト・トゥルナイゼン

カール・バルトと私との往復書簡を収めた本巻は、カール・バルトに関する伝記的内容を含んでいる点でも、また神学史的な重要性の点でも、大きな意味を持っている。バルトと私が親しく交わるようになったのは、両人がアールガウ州で田舎牧師として働いていた時代であった。1913年から1921年までの間に、神学・教会・社会は時代の危急に直面して破綻をきたし、そのためカール・バルトと私は、後に神学の方角転換と新たな基礎固めとなるに至った例の決起へと駆り立てられたのである。当時我々は、仕事の上で緊密に共働していた。そして我々の牧師館にはまだ電話がついていなかったのも、意見の交換は主として手紙によってなされた。それがこの往復書簡となり、それは、バルトがゲッティンゲン、ミュンスター、ボンの教授として神学研究を継続して行った時にも、さらに続けられた。ここにおいて、新しい神学の成立が、それが生じてきた政治的背景ともども、明らかになる。これらの書簡のうち、勿論ごく限られた一部だけが、カール・バルト70歳献呈論文集²⁶⁾と私の70歳献呈論文集²⁷⁾のうちに、既に公刊されている。それは、Siebenstern-Taschenbuch 第71巻、1966年²⁸⁾にも特別に編纂されている。本巻には、関連する書

簡の範囲を拡げて所収した。

本巻は、往復書簡をほぼ完全な形で収録している。もっとも、ある種の削除——各書簡の中で「……」で表示されている——や、数は僅かであるが、手紙全体の省略が必要になった。これらの削除や省略は、主として、内容が我々のプライベートな事柄に関わるためである。全書簡の現物はバルト・アルヒーフにあるから、後にバルトの伝記を書こうとする者や、その他のバルト研究者は、それに拠ることができよう。

正書法と句読法は、慎重に、そしてとりわけ書き手の特徴を損わぬようにして、今日の慣用に合わせた。註は、できるだけ完全を期して、手紙に出てくる人名や、説明を要する出来事に対して付けてある。私は編集者および校訂者として、学問的厳密性の点で過ちを犯していないことを願っている。

手紙執筆者の親類や友人のうち、しばしば言及される者はフルネームではなく、ファーストネームで呼ばれるということを、読者は知っておいたほうがよい。だから、バルト夫人はネリー、トゥルナイゼン夫人はマルゲリーテ、カール・バルトの弟であるペーター・バルト牧師はペーター、同じくハインリヒ・バルト教授はハイナー、ベスタロッツィーアイデンベンツ夫妻はリュディとゲルティ、ゲオルク・メルツ教授はゲオルク、ヴィルヘルム・フィッシャー教授はヘルミ、エミール・ブルンナー教授はエミール、となっている。また、角括弧のほかに、手紙の執筆者自身が用いた丸括弧が出てくることも、述べておかねばならない。私は自分の手紙を、もちろん内容の上で短縮しはしなかったが、しばしばしよった表現で提示したので、その限りでいくぶんバルトの手紙の方へ重心が移されている。

最後に、ほとんど3年に及ぶ仕事の間、私に助力を惜しまなかったすべての方々に、深謝の言葉を申し述べたい。倦むことなく私を手助けしてくれた妻、マルゲリーテ・トゥルナイゼンの名をまず最初に挙げたい。彼女がいなければ、私には、テキストを作成し、無数の註を作るという大きな課題は果たしえなかったであろう。さらに、マックス・ツェルヴェガー、フランツィスカ・ツェルヴェガー²⁹⁾夫妻の名を挙げたい。彼らは私が手紙を整えるに当たって、計りしれない援助をしてくれた。私がとりわけ深く感謝せねばならないのは、バルト・アルヒーフの主宰者にして私の友人、ヒンリヒ・シュテーヴェザント博士である。彼は倦むことのない専門的な助言・助力を与えて下さった。さらに、手紙の必要なコピーを世話して下さったバーゼル大学図書館長、クリストフ・フィッシャー博士に感謝する。また、印刷と出版のためのすべての尽力に対し、チューリヒのTVZ出版と社長のマルセル・プフェントラー氏に御礼申し上げる。最後になったが、私が本当に心より謝意を表わさねばならないのは、最初の共働者であるメッツィンゲン・ノイハウゼン（ヴェルテンブルク）のヘルムート・ゲース牧師である。彼は全く己れを無にして一緒に校正をし、人名と聖句の索引作りを申し出て下さった。彼以上に専門的知識があり、誠実な共働者を、私は考えることができない。事項索引は、書簡全集の最終第3巻に付けることにした。終

わりに、テュービンゲンのエーベルハルト・ユンゲル教授に感謝申し上げる。彼は自らの経験上、次代の神学者たちがこれらの書簡を読むことによって、カール・バルトの神学上のライフワークに通ずる入口を見出すことになるだろうから、この仕事全体を引き受けるようにと、私を励ましたのである。

1973年2月、バーゼルにて

エドゥアルト・トゥルナイゼン

バルト ザーフェンヴィル, 1913年2月23日

拝啓

もう戻って来ました。今度は、〔……〕君を私の結婚式に招待するためです。式は3月27日、ベルンの私たちの家で質素に、かなり少人数で挙げられます。むかしマールブルクで過ごした時¹の代表者として、〔……〕またもしよければ宗教社会主義の現在の代表者として、さらに人間、友人、キリスト者として、来て下さると嬉しいのですが。それじゃ、いいですね、約束すること！

敬具

カール・バルト

1. 二人は共に、学生時代をそこで過ごしたことがある³⁰⁾。

バルト 1913年5月4日

拝啓

婚礼の素晴らしい贈物としてトレルチュの本¹をいただいたのに、まだ君に一言の御礼も述べていないので、君は私のことをどんな風に思っているのでしょうか。私がこの友情の申し出をどんなに嬉しく受け取ったとか、この本をわが手にするのをどんなに楽しみにしているとかは、君に以前既に言っているのですからね。〔……〕今、私は、感謝に続けてすぐ、ロイトヴィルに心よりの祝辞をも添えることができます²。万歳！もう一人の「好意的な」アールガウの牧師！きっと君は、教会会議の中で、これまでシルト³と私とで形成してきた極右派に連なるに違いありません！〔……〕ところで、一つ頼みたいことがあるのです。君は5月18日にまだ暇があって、私の代わりに説教をし、日曜学校で教えられますか。というのは、私は5月19日、レンツブルク³¹⁾で開かれるアールガウ州牧師協議会の席上で、「人格神への信仰」⁴について講演しなければなら

ないのです。そこで、その前の一週間は説教の仕事から解放されていると嬉しいのですが。また、君がこの折にもう一度私のところへ来て、我々の結婚生活を視察できれば、どんなに素晴らしいことでしょう。妻⁵も、君に再会するのを楽しみにしていると思います。もしできるなら、どうかそうして下さい、いいですね。今、沢山の宗教哲学者や教義学者を前にし、取り組んでいます。私のテーマのために、それらの人々をよくよく吟味しなければなりません。

敬具

カール・バルト

1. エルンスト・トレルチュ『キリスト教の諸教会と諸集団に関する社会理論』(Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen, Gesammelte Schriften*, Bd. 1, Tübingen, 1912)。トレルチュ(1865-1923)は、ハイデルベルクの組織神学教授。

2. エドゥアルト・トゥルナイゼン (Eduard Thurneysen 1888-³²) は、1911年から1913年までチューリヒのキリスト教青年会の副主事、1913年から1920年までアールガウ州ロイトヴィルの牧師。

3. パウル・シルト (Paul Schild 1884-1966) は、当時、ザーフェンヴィルの隣りの教会であったユルクハイム³³の牧師。

4. これは、1914年の『神学と教会』誌に掲載された (ZThK 24, 1914, S. 21-32; 65-95)。

5. ネリー・バルト (Nelly Barth 1893-³⁴)。旧姓ネリー・ホフマン (Hoffmann)。

バルト 1913年6月23日

拝啓

一週間前の君の訪問を、私たち夫婦は大変嬉しく思いました。君自身に奥さんがいない間は、どこへでも容易に行けるのですから、これからも必ずたびたび来て下さいよ。[……] 君は新入りですから、牧師集会に出るためには、多分どこかに申し込まなければならないのですが、私は申し込み先を知りません。私自身は行きません。というのは第一に、それは私には遠すぎますし、使える僅かばかりの金銭を、私ならむしろ、妻もいくぶん共有できる楽しみのために用いたいからです。第二に、(同志としての牧師ではなく) 牧師そのものの集まりは、差し当たり私にとっては、単におもしろくないばかりか、いやなものであって、御免こうむりたいからです。あらゆる主義の牧師であふれ返ったテーブルで御馳走を食べることほど、不快なものはありません。講演などは後からでも読めますからね。私は、ヴェルンレ師¹や若い積極主義の人々を一まとめにしてではなく、彼ら一人ひとりと食事を楽しみたいのです。

君が送ってくれたある労働者の奥さんの手紙を、私は昨日、説教の中で朗読しました。私はまだ、プンクト党² (Puncto Partei) に対して心構えが出来上っているというところまで行ってい

ません。私は多分断るでしょう。けれども私は、このことからそう簡単には身を引けません。だが、原則的にはそうすることができなくてはならないし、また我々の信念に訴えれば、それは命じられてさえいるはずだと私には思われます。「非政治化」について君が話してくれたことは、私には本当のところ分かりません。君が言おうとしたのは、キリスト者はすべて政党生活から遠ざかっているべきだということですか、それとも牧師だけがそうすべきだということですか。それでは、福音から離れて無縁になっている〔連中を〕政党に委ねてしまうべきなのでしょうか。私が否と言うとしても、喜んでそうするわけではなく、ある一群の感情を抱きつつそうするので。つまり、私は私自身や他の人々の悲しむべき人間的弱さに対して譲歩をしているのだという感情、私はよき牧師にして同時によき政党人であるためには十分成熟していないように思うという感情、私は社会主義的政党生活における不愉快な点を乗り越えておらず、私の教会の多くの人々に理解してもらえないことを恐れるに違いないという感情です。しかし、この否を言うために、何らかのキリスト者的熱情を奮い起こすことは、私にはできません。私にはこう言うほかないのです。残念ながら、残念ながら、今はだめだ、と。

敬具

カール・バルト

1. パウル・ヴェルンレ (Paul Wernle 1872-1939) は、バーゼルの教会史教授。
2. これは、アールガウ州の社会民主主義政党であり、カール・バルトは後に入党する³⁵⁾。

トゥルナイゼン ロイトヴィル, 1914年6月18日

拝啓

ナウマン¹⁾の主要な著作をすべて送ります。ただし『神の助け』は別です。これは多分、君自身持っているでしょうから。彼の初期のものは、私はほとんど持っていません。バーゼル大学図書館には、小品『キリスト教社会主義とは何か』があります。『神の助け』は、最良かつ最大の文書です。新版では、各聖想 (Andachten) に日付が打ってあるので、ナウマンの発展がずっとはっきりしてきます。ナウマンの変化がとりわけ明瞭になるのは、『アジア』の終章と『宗教に関する書簡』です。その他にさらに、折々に書かれた政治的文書やその他さまざまな文書があります。『博覧会便り』には、近代世界に対するナウマンの喜びが現われ出ています。例えば、エッフェル塔、鉄筋建築、機械についての論文を見て下さい。『太陽の運行』の中の、アッシジのフランチェスコに関する考察は、いかにも彼らしいものです²⁾。私がかつてツォフィンゲン³⁶⁾の中央新聞にナウマンに関して公表した小論を同封します³⁾。とても優れていると思うから送るではありません。そこに言われているすべてのことには、私も今日もはや同意できないでしょう。

しかしそこには、ナウマンの表に出た経歴に関する情報が含まれています。ちなみに、友人ヴィルヘルム・レーウ⁴は、私のよりはるかに信頼できる情報源でしょう。[……]

敬具

エドゥアルト・Th

1. フリードリヒ・ナウマン (Friedrich Naumann 1860–1919) は、福音主義神学者、政治家。

2. F. Naumann, *Gotteshilfe. Gesamtausgabe der Andachten 1895–1902*, Göttingen, 1911⁴; ders., *Was heißt christlich-sozial?*, Leipzig, 1894 (1896²); ders., *Asia*, Berlin, 1899; ders., *Briefe über Religion*, Berlin, 1903 (1916⁶); ders., *Ausstellungsbriefe*, Berlin, 1909; ders., *Sonnenfahrten*, Berlin, 1909.

3. E・トゥルナイゼン「フリードリヒ・ナウマンにおける倫理と政治の相互関係」(E. Thurneysen, *Ethik und Politik in ihrem gegenseitigen Verhältnis bei Friedrich Naumann*, in: *Centralblatt des schweizerischen Zofingervereins*, Jg. 21, 1910/11, S. 138–160)。

4. ヴィルヘルム・レーウ (Wilhelm Loew 1887–³⁷) は、ナウマンの婿、バルトとトゥルナイゼンの学友、神学修士、医学博士、1945年以降はマインツの実践神学教授。

トゥルナイゼン 1914年8月26日³⁸)

拝啓

『新しい道』誌に載った君の説教¹を大いなる喜びと賛意をもって読みました。二重思考の弁証法が見事に浮彫りにされていますし、表現の点でも、複雑で深い諸考察にもかかわらず、すべてが素晴らしく簡潔でしっかりしています。[……] 君がナウマンに関して『キリスト教世界』誌に書いたことも²、極めて適切です。それに反論できるものは、してみるがいい。この暗い時代にあって、我々が「社会的茶話会」を衰退させるようなことがあってはなりません。討議されるべきことが、さまざまあるでしょうから。けれども人々の心は、内々戦争に向かっています。私はしばしば、我々のドイツの友人のことを考えずにはられません。例えばボルンハウゼン³は、どこかで馬に乗り、騎乗パトロールをしていることでしょう。彼を我々のところに拘禁しておくべきでした。

君と奥さんに心より挨拶を送ります

Ed・トゥルナイゼン

1. K・バルト「全国博覧会」(K.Barth, *Landesausstellung*, in: *Neue Wege*, Jg. 8, 1914, S. 304 ff.)。これは、1914年6月7日、ザーフェンヴィルでなされた説教である。『新しい道』誌は、L・ラガツなどが編集する宗教研究の雑誌³⁹)。

2. K・バルト「助け、1913年」(K. Barth, *Die Hilfe* 1913, in: *Die christliche Welt* (= CW), Jg. 28,

1914, Sp. 774–778)。この論文は、F・ナウマンが編集する雑誌『助け——政治・文学・芸術のための雑誌』(*Die Hilfe. Wochenschrift für Politik, Literatur und Kunst*)の第19号、1913年に関する批評である。

3. カール・ボルンハウゼン (Karl Bornhausen 1882–1940) は、マールブルクでのバルトとトゥルナイゼンの学友、マールブルクの組織神学助教授、その後ブレスラウの正教授。

バルト 1914年 8月29日

拝啓

御葉書ありがとうございます。どうやら君はまだ御存知ないようです。レーウはリーゼ・ナウマンと非常時結婚をして、義勇兵として一緒に去って行きました。彼らが現在かの地⁴⁰⁾で示しているこういった英雄主義はすべて、事態がこれほど途方もなく痛ましいものでなければ、賛嘆されたかもしれません。これらの善良な血は、皆なんのためなのでしょう。『キリスト教世界』誌ないしラーデ¹⁾の態度は、最も嘆かわしいものだと思います。今、彼は、幸せな兵隊に関するルターの下らぬ詭弁（少なくとも私には、目下のところこう思えるのです）を我々に最後の慰めとして持ち出すのです²⁾。[……] 憂慮すべきことに、そもそも教会が無力をさらけ出してしまっています。我々の上級長老会の回覧状！日刊アールガウ新聞でのGの説教！ベルンのハードルン³⁾の説教！ベルン教会協議会の諸声明！これらは全く勧めるに値しません。しかし、シェーデリン⁴⁾の説教は素晴らしい。私が持っている文書で、君がまだ知らないものがあれば、すぐ君に送ります。宗教社会主義の会合がじきに開かれるということに、私は大いに賛成です。しかし、どこで開かれるのでしょうか。

敬具

K・B

1. マルティン・ラーデ (Martin Rade 1857–1949) は、福音主義神学者、マールブルクの組織神学教授、『キリスト教世界』誌の編集者。

2. 戦争勃発後、『キリスト教世界』誌は、数号にわたってルターの著作『兵隊も幸せな立場にありうるや否や』(*Ob Kriegsleute auch in seligem Stande sein können*, 1520) を抜粋して載せた (CW 28, Sp. 788 ff., 806 ff., 820 ff., 837 f., 857 f.)。

3. ヴィルヘルム・ハードルン (Wilhelm Hadorn 1869–1929) は、ベルンのミュンスター (=大聖堂) 牧師、ベルンの実践神学教授。

4. アルベルト・シェーデリン (Albert Schädelin 1880–1961) は、神学博士、ベルンのミュンスター牧師、実践神学教授。

トゥルナイゼン 1914年9月3日

拝啓

今度ベルンで宗教社会主義者の集会が開催されることを、たった今、弟さんのペーター¹が手紙で知らせてくれました。それがまことに当を得ていると彼も思っています。我々の宗教関係の言論機関の無力さについて、彼も、我々が抱いているのと同じ慨嘆を表現しています。我々を動かしている思想のうちからは、何も生まれ出てきません。いつもただ、旧い慰藉が新しい熱情をもって語られるだけです。例えばヴェルンレの場合には、そういうことが多分に起こっているように思われます。同封した論説を読んで下さい。「君たちは神と祖国のことを同時に考えるべきであり、考えてよい。また、各人は祖国のために祈るべきだし、そうしてもよい」ということを情熱を込め、改めて宣教して、どうなるというのでしょうか。確かに、我々もそれを知っていますし、行なってもいます。しかし、もし人々が唯一の神に向かって祈りの手を挙げ、同時にお互いに対して武器をかざすならば、それは恐るべき矛盾であり、あくまでもそうなのであって、この矛盾は決定的です。このことが自覚されるべきで、さもなくば一切は底無しの楽天と無思慮に堕してしまいます。各人はただ正しく祈るべきなのです。フランク人も、ドイツ人も、そして最近新聞などで読むように（ドイツのために祈る）トルコ人すらも。これが本当の姿であって、これと違った考え方をする人は妄想家です。そしてヴェルンレも論じているのですが、それこそ成熟した冷静なキリスト教的態度です。しかもそれは、不可抗的必然性でもって歴史から明らかになる、と彼は言います。[……] 無論彼といえども、「汝の御国が来ますように」ともはや祈ることのできない人間になろうとはしません。私に理解できないのは、解けない諸矛盾を無造作に喜ぶこの態度です。[……] おまけに、宗教社会主義の反戦論者に対する安っぽい誹謗があります。それに対して、ラガツ²が今日の破局が持つ改変力について書いていることは、間違っていない。とはいえ、私は近ごろ私の教会のうちに利己心とエゴイズムを見ざるをえないのですが、それが私に、今日の破局もまだ十分苛酷とは言えず、従って最後の破局ではあるまい、ということを教えてくれるのです。——クッター³の説教を同封します。持っていて結構です。私のこの前の日曜説教も同封します。神の怒りを論じたものです。私はそれを特別よいとは思いませんが、それと交換にもう一度また、君のを一・二いただけたらと思います。[……]

敬具

エドゥアルト・Th

1. ペーター・バルト (Peter Barth 1888-1940) は、カール・バルトの弟、M・ラーデ教授の婿、ラウベン⁴¹⁾の牧師、その後マディスヴィル⁴²⁾(ベルン)の牧師。W・ニーゼル (Niesel) と共に、『カルヴァン選集』(Joannis Calvini opera selecta, 5 Bände, München, 1926-1952)の編者。

2. レーオンハルト・ラガツ (Leonhard Ragaz 1868-1945) は、バーゼルのミュンスター牧師、その後

チューリヒの教授。スイス宗教社会主義運動の指導者。

3. ヘルマン・クッター (Hermann Kutter 1869-1931) は、チューリヒのノイミュンスター牧師、新しい社会主義的キリスト教の闘士。説教者・著作家としても著名。

バルト 1914年9月4日

拝啓

ナウマンの本をお返しするのがこんなにも遅くなって、すみません。御礼かたがた、ここにお返しします。この夏それに読みふけたことを、私は大層嬉しく思っています。我々のドイツの友人たちの精神状態が、今やずっとよく理解できるようになりました。それだけ一層共感できるようになったわけでは決してありませんが。この精神状態を駁する詳細な、そして入念に作成した声明文をラーデに送りました¹。どうやら彼は、我々が（中立的ではなく）親ドイツ的であらねばならぬのは当然だ、と素朴に考えているようです。ラーデのような男もこの状況下ではすっかり分別をなくしてしまうこともあるということが——ラガツならこう言うでしょう——「病的徴候」なのです。福音の絶対的思想は、あっさりと当分のあいだ一時休止ということにされ、その間にゲルマンの戦闘宗教⁴³が施行されて、「犠牲」だの何だのというさまざまな言説によってキリスト教的に粉飾されるのです。このことは、『キリスト教世界』誌のキリスト教なるものにあっては、福音の思想は内的な資産ではなく、既に以前から単なる虚飾にすぎなかった、ということの十分な証明です。それは何とも悲しむべきことです。私の見るところでは、マールブルクとドイツ文化は、この破綻によって何か大切なものを失います、しかも永久に。——ところで、レーウは義勇兵として志願したそうです。そしてリーゼとの非常時結婚も、この場合に備えての計画でした〔……〕。

ここに二篇の説教を送ります。最近の説教です。〔……〕それらを出来栄えという点で見ずに、単なる試みとして御覧下さい。実際、現在の我々はすべて、幾分かは独力で、また現今極度に熱心になった教会員の力を借りて、際限のない問題を克服しようと、各人各様に、そして日曜日ごとに違った仕方で試みている最中です。「神の摂理——人間の混乱」、この周りを我々は現在、日曜日ごとに回っており、またそうせざるをえません。君と同様に私もまず、神の摂理という第一の要素に関して一連の説教をしてきましたが、今や私は、第二の要素をもっと強調しています。けれども私は、もっともこの二つを共に見ていたいと思います。それは時にはうまく行きますが、時には余りうまく行きません。君が「神の怒り」を積極的に実りあるものとするやり方は、納得できます。「神は戦争を欲さない」という言い方は、君の文脈の中ではよく分かるのですが、ひょっとしたら誤解を招くかもしれません。神はエゴイズムを欲しません。しかし神は、エゴイ

ズムが戦争においてあらわにされ、それ自体裁きとなることを欲するのです。その際、神のこの裁きの意志は、愛以外の何ものでも、つまり神の義が啓示され強まること以外の何ものでもありません。私なら、多分、神の怒りを「神なき存在」そのものともっとはっきり関連づけ、社会的不正や戦争等を神喪失の徴候ないし帰結として捉えるでしょう。そうすれば、ルター的〔……〕安穩に陥ってしまわずに、ローマ書 8・28にもっと同調できるようになるでしょう。しかしそうしたことは皆、私同様、君もよく知っていることですし、きっと別の説教で判然と述べていることでしょう。〔……〕クッターの説教、ありがとう。でも君の説教のほうが、私の心に訴えるものがずっと多くありました。

敬具

カール・バルト

1. 1914年8月31日付、M・ラーデ宛のバルトの書簡。これは、ラーデの返書と共に、「カール・バルトとマルティン・ラーデの往復書簡」という表題で、『新しい道』誌に公刊された(《*Briefwechsel von Karl Barth und Martin Rade*》in: *Neue Wege*, Jg. 8, 1914, S. 429 ff.)。

バルト 1914年9月25日

拝啓

私はチューリヒ山上にある〔……〕私の義兄¹の別荘におり、有産階級のゆったりした気分で下界の喧噪を見やっております。義兄の書き物机についていると、確かに自分がかかなり奇妙なものに思えてきます。私もベルンに行きたかったのですが、最近またもや旅をすることがやや多くなりましたので、断念せざるをえませんでした。〔……〕最近の様子について、少しばかり手紙でお知らせ下さいませんか。君たちはヴェルンレに向かって一度かなりはっきりと意見を述べるべきでした。彼の最近の二論文は、私にはいまだに鼻もちなりません。ベルン集会については、既にデルスベルク⁴⁴⁾のツーラウフ²(私のツォフィンゲン時代の唯一の「敗残者」!)を通して聞きました。ペーターは一週間前から再びマールブルクより戻ってきています。彼がそこにとどまることを、ラーデ自身は切に望みました。彼は『キリスト教世界』誌の態度に対するペーターと私の断固たる抗議にひどく傷つけられたと感じ、驚き、狼狽したようです(すべて同時にそうなったようです!)。ラーデにとっては、我々が考える以上に、我々スイス人のことが重要なようです。また、ナートルプ³とヘルマン⁴とシュテファン⁵の臨席のもとに、ある大きな討議がなされました。ラーデは、私からの手紙とそれに対する彼の応答を『神学と教会』誌に載せることを企みました⁶(全くラーデ的です!)。けれども私は、このことについてはそれ以上何も聞いていません。現在、かの地ドイツの人々がどれほどひどい困窮状態に置かれているかについて、

我々はいかなる弁解もできない、とペーターは言っています。マールブルク全体が負傷者であふれ返っており、既に今、一人かそれ以上の死人を出していない家はほとんどありません。ちなみに、昨日私は当地で、あるドイツ人軍医からの私信で聞き知ったのですが、ベルギー国境近くの三つの病院だけでも、眼をえぐられたほぼ130人の負傷したドイツ人が手当てを受けているそうです。そうしたことを一々まじかに経験するのは、心のうちにどんな反作用を引き起こすことでしょうか。『キリスト教世界』誌のキリスト教が破綻したことに、疑問の余地がありましようか。我々はこんな状態をどうやって乗り切ることができましようか。かの国にいる我々の友人たちの態度は、それでもやはり、あくまで一つの破綻です。ナートルプ!! しかも『キリスト教世界』誌は、現在報じられているように、まだ最も穏健なほうなのであり、民族意識の薄さのゆえに多くの論難を甘んじて受けねばならないのです。現在ドイツの説教壇からは、大体においてどのような音が響いてくるのかは、全く推測できません。それがこの恐るべき錯誤からひとたび呼び醒まされる時には、事態はどうなるのでしょうか。必要な新しい方向づけは、どこからやってくるのでしょうか。預言者を出現させて欲しいと神に乞い願う時があるとすれば、我々は今こそそうしたいと思います。いずれにせよ、何がしかの発言をしている我々が預言者なのではありません。たとえ現在の我々が、かの国の人々よりもほんの僅か先を見ているとしても。クッターやラガツも違います。私は兩人を訪問しましたが、実際彼らにはやや失望させられました。ラガツの場合には、ある不快な泰然自若（「我々はそれをいつも語ってきた」）のために、私は不愉快になりました。また私は、クッターが現代史の細部に、私の理解を絶する関心を抱き、そしてドイツ国に対する、またドイツが他国に比してわりに正しいという点に対する思い入れ——これは一層不可解です——を持っているのを知りました。彼をこのテーマから引き離すことは、ほとんど不可能でした。そしてその他の点では、人々はとても喜んで彼の話に耳を傾けるのですが、彼の語る政治的見解は、絢爛豪華であるにもかかわらず、私にはむしろ奇怪に思えます。私は彼が日曜日に説教し、日曜学校で子供たちに教えるのを聞く予定で、それを待ちわびています。現在、援助活動のために目が回るほど忙しく立ち働いている他の牧師たちについて〔……〕彼が語る際の調子も、私は嫌でした。無論こうした活動は極めて問題多いものですし、その報いが、これらの人々のなす説教が浅薄になるという形で、当然返ってきます（私は水曜日に、フラウミュンスターのバッハオフナー⁷の話聞き、彼は比較的ましだと思いました）。しかし、卓越した精神の持ち主なら、クッターが昨日したように自分にほればれしながら語るはずがありません。昨晚私はある招待先でケラー牧師⁸と出会いましたが、彼によっても満足させられませんでした、他の点では満足しましたが。私はやはり救いようのない一人よがりの人間です、違いますか。確かに私は、学ぶため・聞くために当地にやって来たのですが、私がこれまで預言者たちのうちに見つけたものは、余り私を教化してくれず、強めてもくれません。我々のつましい集会からのほうが、私の得るところ大でした。とはいえ、これからまだ私には、アウサーシール⁹への遠征や他の随

分多くの遠征が残っており、目指す成果に達するよう、なお希望しています。余った時間には、ビスマルクの、また彼についての本を読んでいます。義兄が彼に関するすべての文献を持っているので、私はこれをよい機会としたのです。元来はこの山上で、カントとフィヒテを学び直したかったので、今でもそうなるように望んでいます。[……] この前君が私を訪ねてくれた際の我々の対話に関して、私は時々まだ考えています。実際にはさまざまな点で、私には理解できませんでした。わけでも奇跡に関する君の意見が。そして、どの程度人は実際にすべてを神様の立場から視るべきか、また視ることができるかは、——この考えのスケールの大きさは、私にもよく感じられるのですが——君にとってよりも、私にとって一層問題なのです。しかし他方では、またもや私は、具体的なもの・曖昧でないものへのある種の愛着を感じます。ともあれ私は、次回に、願わくばすぐに、君の話を聞きたいと思っています。ですから君は、きっと私を許して下さいでしょう。[……] 今日のところは、これで。今晚、私は劇場にすら行くのです。義兄の葉巻のことは言うに及ばず！

敬具

カール・バルト

1. リヒャルト・キスリング (Richard Kisling 1862–1917) は、商人・美術商。ヘートヴィヒ・キスリング (Hedwig Kisling), 旧姓ヘートヴィヒ・ホフマン (Hoffmann) の夫⁴⁵⁾。
2. フリッツ・ツーラウフ (Fritz Zulauf 1885–1965) は、デルスベルクの宗教社会主義の牧師、バルトの学友。
3. パウル・ナートルプ (Paul Natorp 1854–1924) は、マールブルクの哲学教授。
4. ヴィルヘルム・ヘルマン (Wilhelm Herrmann 1846–1922) は、マールブルクの組織神学教授、カール・バルトの師。
5. ホルスト・シュテファン (Horst Stephan 1873–1954) は、マールブルクとライプツィヒの組織神学教授。
6. この往復書簡は、この雑誌にではなく、『新しい道』誌に掲載された。1914年9月4日付書簡の注1を参照。
7. パウル・バッハオフナー (Paul Bachofner) は、チューリヒのフラウミュンスター牧師。
8. アードルフ・ケラー (Adolf Keller 1872–1963) は、ヨーロッパにおけるエキュメニズム運動の発起人の一人、スイス教会連合の主事。
9. チューリヒ市アウサーシールでは、スイス宗教社会主義の発起人・指導者の一人であった宗教社会主義の牧師ハンス・バーダー (Hans Bader 1875–1935) とエマーヌエル・ティッシュハウザー (Emanuel Tschäusser 1868–1943) が活動していた。

トゥルナイゼン 1914年10月27日

拝啓

先週、ヴェルンレから手紙を受け取りましたが、その中で彼は我々を激しく批判して、宗教社会主義の牧師たちに見出されるのは、他に類を見ない衆愚であり、たいそうな決まり文句の鸚鵡返しと、自律的に考える力と意志の欠如であると言っています。「それゆえ宗教社会主義者たちは、私にとっては、しばしば恐ろしく退屈なのです。彼らのうちの一人の話でも聞けば、全員の調子が分かります」。[……]ところで、次のような文も書かれています。「先日聞いたところによれば、カール・バルトは、私が離反した迷える仔羊たちを救い、守ってあげたいと思っているのを知っている、と言っていたそうです。これではまるで、私の側につくのかどうかというこの個人的なものが私の判断基準であるかのようです。これは間違っていると思います。これまであなた宛に出した私の手紙の中に、あなたはきっとそうしたものを何らお認めにはならないでしょう。私がぞっとするのは、あらゆる形態における党派活動、^{はやり}流行、そして老いも若きも神学者たちの間にはびこっている鸚鵡返しなどだけです。積極主義と自由主義という旧い対立に代わって、宗教社会主義と非宗教社会主義という対立が現われ、そしてその後には、ある愚かさが別の愚かさに取って代わる。そうなっても、私には責任がありません。常に私は、誰に対しても、自分で問いと取り組まざるをえないように仕向けてきたのですから」。[……] ヴェルンレは先週チューリヒにいました。彼は上述のことをそこで聞き知ったに違いありません。[……] 私がそれを君にも書いて知らせるのは、ヴェルンレが既に私を非難して、私は単に君に引きずられているだけで、君に対する自分の見解というものを敢えて持つことをしない、などと言ったからなのです。しかし私は、その点で人からとやかく言われる筋合いは全然ないことを知っています。我々二人が同じようなものの考え方をするとか、仕事の仕方に相通ずるところがあるとは、私にはとても思えません。我々はただ理解し合い、相互の交流から何ものかを得ています。我々がよからぬ仕方互いに影響を及ぼし合っているなどということは、実際、問題になりません！違いますか。それに関して、君が何か変だと感ずるところがあれば、私に言って下さい。私は反論する権利を留保しておきます。それにしても、我々は邪魔されたくないものです。

敬具

エドゥアルト

バルト 1914年10月28日

拝啓

ああ、何という嫌な話でしょう！事情をお知らせしましょう。チューリヒに滞在している間に、

私はパウル・ヘガー¹と二回にわたるとてもつらい対論をいたしました。ラガツやバーダーといった人々の個性や傾向が何度も話題にのぼりましたが、これらはヘガーにとって極めて重要な事柄でした。というのは、彼は、宗教社会主義者たちにおける「共同行為」と自分で呼んでいるものの中に、原則として性向とか気質といった心理学的—個人的問題しか見ていないからです。こうした不毛な考察から彼を引き離すために、私は彼の話に口をさしはさんで言いました。ヴェルンレの場合にもやはり個人的な動機が働いているのは確かであって、例えばそれは、彼の弟子たちの非常に多くの者が後になってクッターやラガツの強い影響下に入っていることに対する不満である、と。そのことで私は、ヴェルンレのかつての助手であった君を確かな証人として引き合いに出しました。我々の判断がこうしたヴェルンレの「個人的な事柄」に決定的に影響されることなど、あろうはずがありませんが、ちょうどそれと同じように、宗教社会主義者たちの「個人的なこと」もそれほど重視されるべきではない、と私はヘガーに言いました。しかるに彼は、私にこの命題を最後まで言わさずに、ヴェルンレがかつて学派形成ないし党派形成を考えていたことを強く否定したのです。勿論この点で私は、それが意図されていたわけではないとしても、という注釈を付すことによってしか、ヘガーの言葉を是認できませんでした。私を深く悲しませたのは、パウル・ヘガーが（というのは、他の人がそうしたとは考えられませんから〔……〕！）ヴェルンレのところへ行って、——彼の言葉で言えば——離反した仔羊たちの非常に有毒なおしゃべりを伝えたらしい、ということです。しかし、ヴェルンレがすぐにこのおしゃべりに乗せられて、今や私のことを第三者に対して粗野な言葉で誹謗していることも、私の心を暗くしています。実際、こんな誹謗をされる覚えはありません。君ならそれを彼に知らせられると思うのですが。〔……〕私がとりわけ遺憾に思っているのは、あの発言によって私が君を面倒に巻き込んだことです。私が君に確言できるのは、ただ、あの発言は文脈から見ても、形式や内容から見ても無害であり、「壁の内側と外側とで罪が犯される」という意味で、我々の側の多くの「個人的なもの」と釣り合いを取ってくれるおもりとなって、人々の注意を事柄そのものへと向け直すことにつながるはずだ、ということだけです。

私に引きずられてとか、君に引きずられてとかいうことは、全く馬鹿気であり、ヴェルンレがどれほど人間を知らないかを改めて私に教えてくれます。事実、我々が知り合ってから以来、君は私に依存しないで来ましたし、とりわけ君がチューリヒにいた時からこの方、君が私から学んだものよりも、私が君から学んだもののほうが、きっと大きいでしょう。実際、私をクッターの近づくにしたのは君でした。また、君の言うように、我々はかなり違った仕方でものを考え、仕事をしますが、しかし主要な点では理解し合い、それゆえ喜んで交際することができます。例えば、戦争に対するクッターの姿勢は、目下の私にはかなり幻滅ですが、しかし君はそれを了解しているように思われます。逆に、私はトラウプ²に対するラガツの答えを、私が読んだラガツのものの中で最良だと思いますが、他方君は、どちらかといえばそれを拒絶しているらしい。従って君

はこの点でも、ホイベルク³にいる我々の厳格な検閲官を安心させられるわけです。〔……〕私のラーデ宛書簡の印刷が強行されたことに、私は今、腹を立てています。ラガツに比べて、ラーデは著しく劣ります。

敬具

カール・バルト

1. パウル・ヘガー (Paul Högger 1875–1942) は、チューリヒのグロースミュンスターの牧師で、カール・バルトの従兄弟。

2. ゴットフリート・トラウブ (Gottfried Traub 1869–1956) は、福音主義神学者、最後はドルトムントの牧師。自由主義の牧師ヤート (Jatho) の擁護者で、教会統治を攻撃したため免職になった。Eisernen Blätter (Dortmund 1914 ff., Berlin 1919 ff.) 紙の編集者。彼はこの新聞を通して戦争神学を主張した。「トラウブに対する答え」とは、L・ラガツ「ドルトムントの神学博士、ゴットフリート・トラウブ牧師への答え」(L. Ragaz, Antwort an Herrn Pfarrer Gottfried Traub, Dr. der Theologie, in Dortmund, in: Neue Wege, Jg. 8, 1914, S. 438 ff.) のこと。

3. バーゼルにおけるヴェルンレの住所。

トゥルナイゼン 1914年10月30日

拝啓

お手紙ありがとうございます。君は、君の前回の手紙の一節をあまり悲観的に考えてはいけません。事実を甚だ歪めたヘガーの発言は、当然ヴェルンレを立腹させたに違いありませんから、ヴェルンレがいわば憂さ晴らしをしていることは、実際明らかだと思います。〔……〕ところで、その嫌な話は全体として、君にとっても私にとっても、我々の敵対者たちが個人攻撃によって、事柄そのものからすればそれほど大きくはない裂け目を広げているということの新たな証明となります。それとも、ラガツやクッターに対抗する何らかの根拠ある、多少とも明確な立場が、ヴェルンレやヘガーらの中に見出されるのでしょうか。ありはしません。むしろ分け隔てているものは、まさに、相手方に対して抱いている個人的偏見であり、そこから原則上の対立が生み出されているのです。〔……〕宗教改革記念日曜日のために、ルターの教会説教集を読みました。論争家ではありましたが、ルターの場合にはやはり、あらゆる対立を越える或る認識の力によって、思索と生とが繰り返し対立を乗り越えて行きます。私はそこから自分のために、対立へと向かう決意ではなく、多かろうと少なかろうと自分がちょうど所有しているだけのものを越えて生きようとする決意を引き出します。それは、私の感じでは、クッターがラガツに対して持っている優越性の根拠でもあります。クッターは、単に諸対立を越えて生き、戦おうとするばかりか、沈黙し

ていても待ち、自分のいる場で直ちに思索と建設をおし進めることができるわけですから。[……]

私は、ラーデ宛の君の手紙があらずもがなのものだったとは、全然思いません。私にしてみれば、君の鋭く簡潔な明瞭さのほうが、ラガツがラーデに語りかける際の説教調よりも、好ましく思えます。君は、我々の多くの者も同時に感じていることを、スイス人としてはっきり述べています。ディーチ¹も同じ印象を持っています。彼はラーデの返信について、こう述べました。つまり、ラーデはしょっちゅう戦争「体験」を引き合いに出し、はっきりした根拠も挙げずに、それを我々に対して持っている長所だと主張するけれども、これにはぞっとする、そしてその背後でややもすれば心が有頂点になっており、それは個々人の良心に対する強制だと考えられる、と。体験に遡ることは、それに反することは余り言えないという利点を絶えず伴いますから。

月曜日の茶話会には行きません。兵役にとられた教師に代わって授業を持たねばならず、時間がほとんどないのです。おまけに、『教会新聞』(Kirchenblatt)に載せる書評を二本背負い込んでいます。それらは組織神学上の主題に関わるものですが、私はこの領域で依然として力不足を感じています。そして、マールブルクで既に名が通り、引く手あまたで人々から一目も二目も置かれ、カントの三大批判をすっかり研究し尽したザーフェンヴィルの男がわが小論を読むようになる時を、私は今から恐れています。私が学校での新しい任務に少しなじんだら、すぐにまた君に会いたいものです。時間があれば、また何か近況をお知らせ下さい。ところで、教会会議も間近に迫っています。人々はそこで再会し、多分再びお互いを闘いの同志として必要とすることでしょう。

敬具

エドゥアルト

1. マックス・ディーチ (Max Dietschi 1873-1951) は、セオン⁴⁶⁾ (アールガウ) の卓越した牧師。

バルト 1914年11月5日

拝啓

さあ、第12回教会会議とベルン会議¹に、同時に来て下さい。君がこの義務の葛藤の間でどう身を処するのかは、私の知りたいところです。ベルン会議自体のほうが重要であるのは、明らかです。副牧師服務規定に関しては、[……]我々がいなくても、アーラウで審議可能ですから。[……]

私は教会長老会に対して、それが最初に出した戦争回覧状の(また、ひょっとしたら祈禱日声明の)低次元の宗教性について質問しようと、半ば考えています。しかし私は、それをほっておくこともできます。もっともその場合には、クッターによれば心にしまっておいたほうがよいようなあらゆることが「無分別にしゃべり散ら」されることにならざるをえないでしょうが。それ

で私は、教会会議は自分から進んですっぽかすでしょう。〔……〕ベルン会議のプログラムを君にも送ります。〔……〕私はベルン会議に出なければならないと思っています。〔……〕

二週間前に、私は〔マールブルクの〕ヘルマンから、「学部全体から心よりの挨拶をこめて」と書かれた三束のドイツ福音教会の印刷物を受け取りました。昨日、私は返信を書き上げましたが、妻はそれが部分的に烈しすぎると感じました。私は、その国の事情に通じている弟のペーターに、それを吟味してもらうために送りました。返信には三つの「質問」が含まれています。1. ドイツの「文化人」の学問性について。2. 宗教的論拠としての戦争「体験」について。3. 「聖徒の交わり」と、それがドイツの独善性によって脅かされていることについて。

当地で私は、教師たちとの間で嫌な目に会いました。私も教師の代役をしようと申し出たのですが、この申し出に対して私は、そもそも教師にしたい放題のことをさせるような学校援助によっては学校は守れないという無礼な発言を返されたのです。私が学校援助から身を引くのが、一番よいのかも知れません。何と言っても私は、そこで嫌な思いをするだけですし、争いを避けようと思えば——私はそれを欲しません——好ましいものは何も得ないでしょうから。この「十字架」をさらに担って行くのが私の義務なのか、それとも、我々が諸々の課題と不可避の十字架とに事欠かない我々本来の職務へと引きさがるべきか、またもや私の心は揺らいでいます。

君が茶話会に来なかったことは、残念です。というのは、エブレヒト²と私との間で（日刊アールガウ新聞に載った「神学者と戦争」に関する彼の論説をめぐって）、そしてラ・ロッヘ、ミュラー、フィッシャー³と私との間ではドイツ人に対する我々の立場をめぐって、激論が交わされたからです。『プロテスタント新聞』（Protestantenblatt）にハンス・パウ⁴が、ラガツに激しく反対して、次のように書いています。——宗教社会主義者たちは、下のはしごのところに立っていて、上にいる消防夫に向かって叫んでいる。「手が黒く汚れちゃいますよ、僕たちはもう君らに消防夫という名を与えることはできません」。宗教社会主義者たちは、軍旗たなびく時代に下らぬおしゃべりをしているのだ——と。

敬具

カール・バルト

1. ベルン会議は、教会・神学・世界の情勢についての自由で非公式な論議の場であった。

2. ローベルト・エブレヒト（Robert Epprecht 1889—）は、シェフトラント⁴⁷⁾（アールガウ）、ザンクト・ガレン⁴⁸⁾、チューリヒの牧師、ザーフェンヴィルの隣接区の牧師、現在は隠退。

3. いずれもアールガウの牧師。

4. ハンス・パウ（Hans Baur 1870—1938）は、バーゼルの牧師。

トゥルナイゼン 1914年11月24日

拝啓

ヴェルンレの手紙をどうもありがとうございます。どうやら彼は、我々が彼に対して捨て切れないでいるのと同じ感情を君に対して抱いているようですね。つまり、人が本当に何を考え、何を言おうとしているかに全く耳を傾けようとしなないという思いです。[……] いずれにせよ、宗教社会主義者たちにあっても、完全な一致があるわけではありません。例えば、グライエルツ¹が熱望しているのは、行動を日指す政治的態度とは区別される、純粋に内面から定められた宗教的な姿勢をはっきりと打ち出すこととは、やはり違うようです。強烈な政治的衝動を持ったラガツも、神に向かい、神からのみ最も偉大なものを期待する、卓越した信仰的態度を明確にすること以上のことを、きっと欲しているのでしょう。これは私が前々から抱いていた疑念で、このため私は、ますますクッターのほうへ引き寄せられるのです。[……]

敬具

エドゥアルト

1. カール・フォン・グライエルツ (Karl von Greyerz 1870-1949) は、著名な宗教社会主義の牧師、最後はベルンの牧師。

バルト 1914年12月7日

拝啓

私が昨日、キェンゴルディンゲン⁴⁹⁾で社会民主党員たちにどんな話をしたか、もしかしたら君も知りたいと思っているかもしれませんね¹。討論の中で、ある男がとても感じのよい言い方で、「君が我々に述べたことは、確かにイエスと弟子たちの真意ではある。だが世と人間が不完全なことを顧慮すれば、我々にとってもっと容易な別の道があることを君は知らないのかね」と言いました。さらにある労働組合員が私に、「待つ」ことの不可能性とプロレタリア闘争の必然性について教示したのです!! [……] 我々が社会民主党員たちの間で、また彼らに向かって講演する際のむずかしさが、改めて分かりました。我々は、宗教上のお墨付を与えてやることによって、また彼らの政治的エートスに適合したあらゆるキリスト教的願望でもって、彼らの党派心を強めてしまうか——あるいは、彼らに彼ら自身を越えたところを指示しようと努め、それによって(昨日そういう印象を持ったのですが) 多くの者には重すぎる荷を彼らに課してしまうか、そのいずれかになってしまいます。そもそもこうした講演を引き受けようというのであれば、正しいのは、今述べた危険にもかかわらず、やはり後者でしょう。どちらが正しいかと問われれば、やはり後者だと思います。まさに現今では、労働者の間には、急進的社会主義に対して、一般に考えられている以上の共感があります。とはいえ、言うまでもありませんが、こうした考え方〔＝急進的

社会主義—— 訳者——] が一般に広まることなど考えられませんし、それゆえ恐らく、組合指導者たちのああした質問は、時と共に例外となるでしょう。当面、私は、ロートリスト⁵⁰⁾での社会主義者たちのクリスマス・パーティーで、また講演しなければなりません。そこは昨年、とても感じのよい所でした。

我々が昨晚過ごした禁酒時間は、次のような次第で進められました。

1. 讚美歌「希望と信仰の力に満ちて……」
2. 『鐘』誌に載っているクッターの小児教義問答²⁾の朗読
3. 讚美歌「いざ主は来たらん、ハレルヤ……」
4. 再臨の備えに関する、ある娘のスピーチ
5. ある若者（第55大隊の曹長）のスピーチ、および
ア) 『自由アールガウ人』(Freien Aargauer) 誌上のある文の朗読
イ) 兵役の思い出
ウ) 祈りが聞き入れられるという（全く忌しい敬虔主義的な）物語の朗読
6. ある娘によるシラーの『鐘』の朗誦!!
7. 戦時におけるバーゼル婦人病院の調理場での体験に関して、ある娘の報告〔……〕
8. 讚美歌「ああ、私はどのような暮らしをしているか……」（三つの歌は、出席者たちが提案したのです!）

私がこれを君にお知らせするのは、この場でしばしば発揮されたさまざまな才気と天分を君に知ってほしいからです。こうした豊かさにもかかわらず、むしろ私は消沈して帰ってきました。このようなオーケストラを指揮することなど、私には到底できないと思ったからです。材料は確かにある、しかしそれは恐るべき混沌のうちにあります。5番目のものだけでも、そのさまざまな構成要素を加工し融合させるためには、一人の牧師が必要でした。彼は決して錯乱した人間などではなく、むしろ非常に思慮のある冷静な、そして実際的なアールガウ人の典型です。7番の娘は、以前は模範的な堅信礼受講者でしたが、ジュネーブとバーゼルに滞在していたため、今は幾分ずれています。一度、日曜の晩においで下さり、私の教会員たちに力強い言葉を聞かせてやってくれませんか。我々は決して偏向してませんが、ありとあらゆる方向から攻め立てられかねません。けれどもそれは、我々にはとても必要なことです!

私の子供³⁾はもうお座りができ、「パパ」と言います! 君にはまだ奥さんがいないんですね! /

敬具

カール・バルト

1. 講演「戦争、社会主義、キリスト教」(《Krieg, Sozialismus und Christentum》)。未公開。
2. H・クッター「戦争に関すること——小児教義問答——」, 『鐘』(チューリヒ・キリスト教青年会月刊誌) 所収 (H. Kutter, 《Etwas vom Krieg. Eine Kinderlehre》, in: Die Glocke, Jg. 23, Dez. 1914, S. 13 ff.)。

塩谷 饒・宇都宮輝夫

3. フランツィスカ (愛称フレンツェリ)・バルト (Franziska (Fränzeli) Barth)。1914年4月13日生まれ、マックス・ツェルヴェガー (Max Zellweger) と結婚。

トゥルナイゼン 1914年12月14日

拝啓

この間の手紙、どうもありがとうございます。また、講演を送って下さり、感謝しています。講演の内容がよく分かり、大きな歓びを覚えました。君がここで目指している社会主義の深化・掘り下げが容易には理解されないということは、何ら驚くにあたりません。むしろそれは、唯一つ希望に満ちた道が依然として残されていることを意味します。

君が君の禁酒運動について話してくれたことによって、私の心はほとんど妬ましさで一杯になりました。私にもう少し「才気」があったら嬉しいのだが、と。君が可能だと思うなら、私は、年が明けたら是非一度、喜んで提携の時間を請け負いたと思います。そのためのテーマを適宜私に知らせて下さい。クリスマスが過ぎてからでないと、多分我々は、もう余り手紙をやり取りできないでしょう。だがその時は、まるで全速力で突入することになってしまったトンネルの出口のような具合に、パッと開けるものです。君もそう思いませんか。

敬具

エドゥアルト・Th

トゥルナイゼン 1914年12月28日

拝啓

さて、クリスマス・パーティーの喧噪も今や止まりました。昨日は五回も話をしなければなりませんでした。葬式と、説教が二回、[……] クリスマス・パーティーで二回です。それでも、まあまあです。手許に二冊の《Hilfe》誌があります。ナウマンが戦争とクリスマスについて大胆に展開している議論は、悲しむべきことであり、やかましい冗舌であって、トレルチュのほうがはるかに深く、誠実です¹。『新しい道』誌のラガツの新しい号は、私が読んだ限りでは優れており、例えば彼の説教²がそうです。ともかく、『新しい道』誌が存在し、自らの立場を非常に勇敢に主張していることに対しては、感謝しなければなりません。オルテン⁵¹の社会主義者たちは、私に問い合わせてきませんでした。どうやら彼らは、君の推薦にもかかわらず、私を信用していないようです。そうしてくれても、私には厄介なことだったでしょうが。ヴィーザー³が私に素晴らしい手紙を書いてよこしました。そこには就中、次のように書かれています。『教会新聞』

に寄せたヴェルンレの長い論説を読んで、私の心は痛みました。彼の書いていることはすべて、宗教社会主義者への敵対を目指しているからです。どうしていつも、こんな意見ばかり表明するのでしょうか。このような下らぬいがみ合いのために、一切はたちどころに浅薄なものと化し、肝心な問題が忘れ去られてしまうのです。実際ヴェルンレにあっても、彼がこうした諍いに引き込まれて以来、どれほどの徒労をしてきたかが、明らかになります」。—— ディーチが我々二人と一緒に来春セオンでやりたいと言っていた福音伝道週間について、もう彼は手紙で君に連絡してきましたか。年が明けたら、君はベルンへ行き、私はことによるとチューリヒへ行くかも知れません。その後すぐ一度会いたいものです。

敬具

エドゥアルト

1. F・ナウマン「1914年クリスマス」(F. Naumann, *Weihnachten 1914*, in: *Die Hilfe*, Jg. 20, 1914, S. 848 f.)。E・トレルチュ「地上の平和」(E. Troeltsch, *Friede auf Erden*, ebd. S. 833 f.)。
2. L・ラガツ「平和をもたらす人たちは幸いなり (マタイ 5・9 に関する説教)」(L. Ragaz, *Selig sind die Friedebringer*, in: *Neue Wege*, Jg. 8, 1914, S. 488 ff.)。
3. ゴットロープ・ヴィーザー (Gottlob Wieser 1888–1973) は、バーゼルのピニゲン、東スイス、バーゼルのリーエンの牧師。バルト、ゴーガルテン、トゥルナイゼンの友人。数年間、『改革スイスの教会新聞』(*Kirchenblatt für die reformierte Schweiz*) の編集者を務めた。

(註)

- 1) 190頁，地図1 参照。
- 2) 190頁，地図2 参照。
- 3) *Der Römerbrief* (Bern, G.A. Bäschlin, 1919) ; *Der Römerbrief*, Zweite Auflage (München, Christian Kaiser, 1922). 第2版には邦訳がある。吉村善夫訳『ローマ書』(『カール・バルト著作集』第14巻) 新教出版社，1967年。小川圭治・岩波哲男訳『世界の大思想・バルト・ローマ書講解』河出書房，1968年。
- 4) *Suchet Gott, so werdet ihr leben!* (Bern, G.A. Bäschlin, 1917). 小山誠太郎訳『神を求めよ，さらば生くべし』長崎書店，1938年は，この抄訳である。
- 5) *Komm, Schöpfer Geist!* (München, Christian Kaiser, 1924)。
- 6) ディートリヒ・ボンヘッファーの用語。彼によれば，現代は無宗教の時代であり，人間の自律性を目指す運動がある意味で完成の域に達した段階である。「成人した」・「成人性」という言葉は，現代のこの特性を指す。
- 7) *Biblische Fragen, Einsichten und Ausblicke* (München, Christian Kaiser, 1920). 山本和訳「聖書における問いと明察と展望」(『カール・バルト著作集』第1巻) 新教出版社，1968年。
- 8) “Die neue Welt in der Bibel.” in *Das Wort Gottes und die Theologie* (München, Christian Kaiser, 1924).
- 9) 「エペソ人への手紙」6・12に由来する言葉と思われる。
- 10) ブルームハルトのモットーとも言うべき言葉。この言葉については，そしてブルームハルト父子に対するバルトの関係については，井上良雄『神の国の証人ブルームハルト父子』新教出版社，1982年を参照せよ。なお，これは特筆すべき書である。
- 11) *Der Christ in der Gesellschaft* (Würzburg, Patmosverlag, 1920). 村上伸訳「社会の中のキリスト者」(『カール・

- ル・バルト著作集』第6巻) 新教出版社, 1969年。
- 12) “Auf das Reich Gottes warten,” in *Der freie Schweizer Arbeiter*, Nr. 47, 1916. これはクリストフ・ブルームハルトの『家庭聖想集』に対する書評である。バルトは当初, これをラガツの編集する『新しい道』誌に寄稿したが, ラガツに書き直しを求められたため, そこへの掲載を断念した。両者のブルームハルト理解には, 小さからぬ対立があったのである。
- 13) 説教集第1巻の初版にはなく, 再版に収録されている。バルトは, ブルームハルトから直接に書評に対する賛同を得たのではない。本稿には訳出していないが, 1916年10月19日付のトゥルナイゼン宛書簡において, バルトは, ブルームハルト自身が彼の書評に大層満足していることを自分の叔母から聞いた, と記している。
- 14) *Die protestantische Theologie im 19. Jahrhundert* (Ev. Verlag AG. Zollikon-Zürich, 1947).
- 15) 1921年1月, バルトはゲッティンゲン大学より招聘状を受け取る。これは彼にとって寝耳に水とも言ふべき突然の招聘であって, 1921年2月1日付のトゥルナイゼン宛書簡には, その時の彼の驚きがよく現われている(本稿には訳出していない)。ゲッティンゲン大学といえば, リッチェルもいたことのある名門であるし, バルトは教授資格取得論文はもとより, 学位論文すら書いていないのであるから, 彼の驚きも当然かも知れない。結局彼は, 1921年9月26日に『ローマ書講解』第2版を書き上げた後, 同年10月13日にドイツに向けて旅立つ。
- 16) 言うまでもなく, 「非神話化」も「前理解」もルードルフ・ブルトマンの用語であり, 新約聖書の解釈学的方法論に関わる概念である。簡略化して言えば, 時代に制約された神話の諸表象から新約聖書の使信を解き放ち, それを実存論的に解釈すべし, というのがブルトマンの提唱内容である。詳しくは, R・ブルトマン著, 山岡喜久男訳『新約聖書と神話論』新教出版社, 1980年を参照せよ。
- 17) 「結合点」とは, エミール・ブルンナーの提唱した概念で, その意味内容は, 語それ自体からも文脈からも明らかだと思われるが, 啓示の主権性・超越性を認めつつも, 他方ではそれに対する人間の受容応答能力という自然神学的要素を保持しようとするものである。
- 18) Wilhelm Vischer, *Christuszeugnis des Alten Testaments*, I, 1934; II, 1942.
- 19) 「積極的(positiv)」とは, 「思弁的・理性的・自然的」などと対立する言葉で, 歴史的事実としてのキリスト教を重視する立場を指す。その意味では, 実証的と訳すこともできよう。具体的に言えば, 近代プロテスタント神学の中で, 自由主義神学に対して批判的・否定的であった保守派の立場である。
- 20) ボンヘッファーは, 死・苦難・罪責・不安といった人間の普遍的問題の中に宗教的領域を設定し, そこからの救済のために神を求める態度を排斥した(このようにして要請される神を, 彼は「機械仕掛けの神(deus ex machina)」と呼んだ)。それに対して, ボンヘッファーは, まず宗教的領域を設定しておいて, その中でキリスト教を論ずることのなかった唯一の人物として, また無宗教的キリスト教を最初に提唱した神学者として, バルトを高く評価する。しかし他方でボンヘッファーは, 究極のものへの何らの道備えもなしに専ら啓示を前面に押し立てるバルトのやり方を, 「啓示積極主義」と呼んで批判した。
- 21) *Widerstand und Ergebung* (München, Christian Kaiser, 1951). 倉松功・森平太訳『抵抗と信従』新教出版社, 1964年。
- 22) Franz Overbeck, *Christentum und Kultur*, Hrsg. v. Carl A. Bernoulli (Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1963 (Nachdruck d. Ausg. Basel 1919)).
- 23) “Unerledigte Anfragen an die heutige Theologie,” in: K. Barth und E. Thurneysen, *Zur inneren Lage des Christentums* (München, Christian Kaiser, 1920).
- 24) 1920年4月20日付でトゥルナイゼンに宛てたバルトの書簡。本稿には訳出していない。
- 25) 最初これは, 『キリスト教世界』誌上の論戦という形で, 五回にわたって行なわれた(*Christliche Welt*, 37. Jg., 1923, Heft 1/2, 5/6, 9/10, 16/17, 20/21)。後にこれらはまとめられて, Karl Barth, *Theologische Fragen und Antworten* (Evangelischer Verlag AG. Zollikon, 1957) に再録された。
- 26) *Antwort, Karl Barth zum 70. Geburtstag am 10. Mai 1956* (Zollikon-Zürich, Evangelischer Verlag, 1956).

その831～864頁に、1914年から1922年までの計53通の手紙が収録されている。

27) *Gottesdienst–Menschen dienst, Eduard Thurneysen zum 70. Geburtstag am 10. Juli 1958* (Zollikon–Zürich, Evangelischer Verlag, 1958). その7～173頁に、1921年から1925年までの計96通の手紙が収録されている。

28) Karl Barth・Eduard Thurneysen, *Ein Briefwechsel aus der Frühzeit der dialektischen Theologie* (München und Hamburg, Siebenstern Taschenbuch Verlag, 1966).

29) フランツィスカは、バルトの長女。

30) バルトのマールブルク時代は、1908年4月から翌年8月までで、R・ブルトマンと知り合ったのもこの時代である。当時のマールブルクには、ヴィルヘルム・ヘルマンらが教壇に立っていた。

なお、「ベルンの私たちの家」とは、言うまでもなく、バルトの両親の家である。バルト一家は、バルトが2歳であった1889年に、パーゼルからベルンに移って来た。バルトが妻となるネリー・ホフマンと知り合ったのは、彼がジュネーブで副牧師をしていた時代である。

31) 地図2参照。

32) 没年は、1974年。

33) 地図2参照。

34) 没年は、1976年。

35) 本稿には訳出しなかったが、1915年2月5日付の手紙で、バルトはスイス社会民主党への入党の事実をトゥルナイゼンに知らせている。入党そのものは、同年1月26日である。

36) 地図2参照。

37) 没年は、1977年。

38) 第一次世界大戦が前月の28日に勃発している。

39) *Neue Wege* 誌については、金井新二『「神の国」思想の現代的展開』教文館、1982年、111頁以下に詳しく論じられている。

40) ドイツのこと。

41) ベルンの西、約15kmにある都市。

42) 地図2参照。

43) 原語は Kampfreigion. Antwort 版と Siebenstern 版では、戦闘神学 Kampftheologie となっている。

44) 地図1参照。現在は通例デレモンと呼ばれる。

45) 本文ではリヒャルト・キスリングをバルトの「義兄 (Schwager)」と訳しておいたが、正確には日本語の義兄に当たらない。彼は、バルトの妻 (ネリー) の姉 (ハートヴィヒ) の夫である。

46) 地図2参照。

47) 地図2参照。

48) 地図1参照。

49) ツォフィンゲンとオフトリンゲンの間にあり、現在、人口3500人ほどの村。ザーフェンヴィルの南西数キロに位置する。

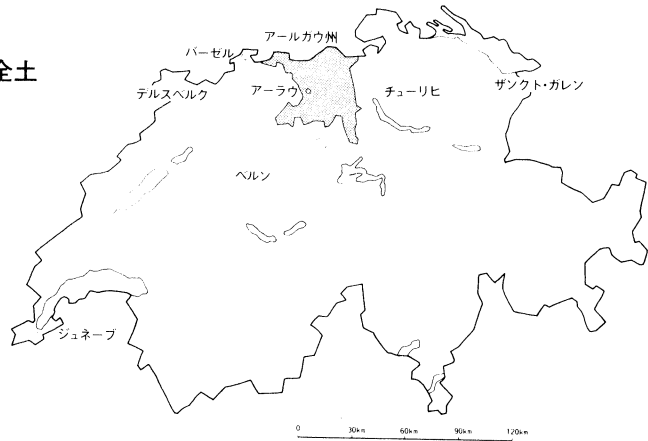
50) 地図2参照。

51) 地図2参照。

(昭和61年5月21日 受理)

1. スイス全土

関係地図



2. アーラウ周辺

